如何なる事かならざらん　大蛇は如何に猛くとも
三五教を守ります　仁慈無限の皇神の
威力に敵する者はない　私は確信ある程に
皆さん心をシャンと持て　ドッコイショ！〳〵
思ふたよりもきつい坂　ガラ〳〵〳〵アイタツタ
あんまり喋つた天罰で　ドッコイ〳〵〳〵ショ
すつてんころりと轉倒し　強か脊骨を打つたぞよ
こいつは耐らぬドッコイショ　さはさり乍らウントコセ
今から俺が屁古たれて　どうして成就するものか
常住不斷に信仰した　其神力のウントコショ

現はれ出づる今や時　神が表に現はれて
善惡正邪を立て別ける　其御言葉が實ならば
決して心配ドッコイショ　皆さん喜べ要らないぞ
あゝ　惟神々々　國魂神の純世姫
月照彦の御前に　三五教の孫公が
孫公別と現はれて　ウントコドッコイ選まれて
今は尊き宣傳使　心を平に安らかに
諾べないたまひて　鼈の　湖水の大蛇を　悉く
言向け和す神力を　授けたまへよ　惟神
神の御前に誠心を　捧げて祈り奉る

ウントコドツコイドツコイショ　レコード破りの風が吹く
ウントコドツコイ散らされな　ウカ〳〵しとると笠が飛ぶ
笠ばつかりか體迄　木の葉のように散りさうだ
ウントコドツコイ力瘤　體に一面ウントコショ
神徳許りを充實し　この難關をやす〳〵と
貫通さして下しやんせ　偏に願ひ奉る
畏み〳〵ねぎまつる」

と歌ひながら、風に吹かれつゝ急阪を下り行く。

お愛の方は聲も靜かに謠ひ出した。

お愛「熊襲の國に名も高き　白山峠の峰よりも
譽の高き三五の　道に仕ふる宣傳使
黒姫さんの供となり　現はれ來ます孫さんが
皇大神の御心も　悟らせたまはず山の上
上りつめたる慢心の　雲に包まれ自分より
名さへ愛たき宣傳使　孫公別と名乘りつゝ
意氣揚々と勇み立ち　喜び給ふ折柄に
天津御空に神の聲　忽ち聞ゆる恐ろしさ
名利の慾にかられたる　孫公さんは氣が付かず
宣傳使をば笠にきて　白山峠を下りゆく
あゝ　惟神　々々　三五教の孫さんよ

どうぞ心を取り直し
矢張元の孫さんで
戀路の慾に離れたる
司の名譽に撞れて
雅號をたてに進み行く
あゝ惟神々々
早く誠にかへるよに
些つとは推量してお呉れ
お足に氣をつけなされませ
あゝ惟神々々
執着心を拂拭し
大蛇退治に往くがよい
お前は又もや宣傳の
天地の神の許さない
其心根ぞいぢらしき
お前の心が一時も
お愛が祈る胸の中
申し〳〵皆さんよ
此處には螟蛉が澤山居る
神の許さぬ宣傳使
大蛇の退治が何として
私は案じて耐らない
今の間に改めて
天津御空に跼くまり
謙遜りつゝ三五の
これぞお愛が孫さんに
惡うは思ふて下さるな
御靈幸はひましまして
神の御前に功を
一日も早く歸るべく
旨く出來るで御座いませう
左樣な野心を起すより
元の心に立ち歸り
大地に蹐なしながら
道を歩んで下しやんせ
對する誠の親切だ
あゝ惟神々々
我等四人の一行が
太しく立てゝ故郷に
守らせたまへよ天津神

國津神達百の神　　國魂神の御前に
誠心寵めて祈ぎまつる」
と謠ひつゝ靜に下り行く。
三公は坂を下りつゝ謠ひ出した。

三公「ヤットコドッコイウントコショ　向ふに見ゆる湖水は
父と母とが其昔　　八岐の大蛇の片割と
人の怖るゝ山神に　　命を取られたドッコイショ
思ひ出深き仇の湖水　　三五教の御教を
聞いて心を取り直し　　心平に安らかに
敵を言向け和さんと　　一たん心に極めたれど
どうしてこれがウントコショ　恨を晴らさで置かれうか
熊襲の國に名を賣つた　　屋方の村の三公が
顏にも係はる一大事　　親の敵を前に見て
無抵抗主義の御教が　　どうして實行出來やうか
思へば〳〵腹が立つ　　年が年中大蛇奴を
亡ぼし呉れんと思ひ詰め　　大蛇々々〳〵と口癖に
ウントコドッコイ云ひ通し　　世界の奴らがドッコイショ
大蛇の三公と呼び出した　　皆さん足許要心だ
螟蛉や蜾蠃がのそ〳〵と　　其邊あたりを這うて來る
孫公さんの宣傳使　　何程神力あるとても

何だか影が薄いよだ　　こんな事なら黒姫を
無理に頼んでドッコイショ　　來て貰つたらよかつたに
後で氣の付くドッコイショ　　癲癇病みの馬鹿思案
後の祭ぢや仕方ない　　もうこれからは俺達は
天地の神を一心に　　祈りて神の御守り
ウントコドッコイ守られて　　亡ぼすよりも道はない
あゝ惟神々々　　純世姫の御前に
心を請めて願ぎまつる　　朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも　　湖水の大蛇は猛ぶとも
地震雷火の雨が　　一度に襲ひ來るとも

誠一つの言靈の　　御息に大蛇を言向けて
凱旋せなくちやドッコイショ　　數多の乾兒に三公の
男が立たないドッコイショ　　今迄作つた罪惡の
報ゐ忽ち酬ひ來て　　黒姫さんには見離され
力の足らぬ孫さんの　　ウントコドッコイ手に餘る
勁敵前に控へつゝ　　進み行く身ぞ悲しけれ
此世を造りし神直日　　心も廣き大直日
今迄盡せし身の咎を　　直日に見直し聞直し
ウントコドッコイ宣り直し　　許させたまへや天津神
國津神達國魂の　　御前に願ひ奉る

あゝ　惟神々々　御霊幸はひましませよ」

と謠ひながら下り行く。

虎公は又もや歌ひ出した。

虎公「ウントコドツコイドツコイショ　此山道は些と酷い
うつかりしとると谷底へ　轉んで頭を割る程に
ウントコドツコイ氣をつけよ　アイタッ、、躓いた
彼方此方にドツコイショ　高い石奴がゴロ〳〵と
遠慮もなしに轉げてる　こんな手合に出遇つたら
武野の村の俠客も　到底頭が上らない
獅子狼や虎熊や　鬼や大蛇も恐れない
虎公さんもドツコイショ　此坂道にや耐らない
何時迄つてウントコショ　眞逆樣に顚倒し
頭を割るか分らない　孫公さんに神徳が
十分に具はり居るならば　こんな心配ないけれど
俄作りの宣傳使　ウントコドツコイ鼻糞で
的張つたやうな心持　ま一つ安心出來惡い
あゝ　惟神々々　師匠を杖につくでない
人をば力に致さずに　誠の神を力とし
ウントコドツコイ行くならば　ぞんな守護もしてやると
大神樣の神勅　俺はこれからドツコイショ

孫公さんの宣傳使
心の誠を發揮して
陣屋に忽ち突進し
ウントコドッコイ禍を
武野の村の俠客を
筑紫の島に輝かし
盡さにやおかぬ我心
守らせ給へ天津神
產土神の御前に
あゝ惟神々々
力になさず村肝の
威猛りまがふ曲神の
勝鬨あげて世の人の
根本的に除却して
云はれた譽を彌高に
三五教の道のため
完美に委曲に聞し召し
國津神達八百萬
畏み〳〵願ぎまつる
御靈幸はひましませよ」

と謠ひながら、漸くにして下り三里の山坂も、其日の眞晝頃麓に下りついた。

（大正一一、九、一六、舊七、二五、加藤明子錄）

瑞月

數萬の信徒に責任背負ふ
僕には度々君の宅
訪づぬる暇は見付からぬ
用事があらば來ても良い
併し度々來られては
困るは僕のみで無い
僕の家族も同樣だ
それだに君は僕に對し
來たれ〳〵と矢の使い
眞に淋しい恐ろしい
恐はし見たしでクナーボーが
生きた虎をば
見に行く樣な
妙な感じが
僕はする

第一四章　空氣焔（九七八）

一行四人は漸くにしてスッポンの湖水の南岸に辿り着いた。此時已に夜はスッブリと暮れ果て、鬼哭愁々として寂寥身に迫り來る。肝腎の自稱宣傳使孫公別命は、地震の孫よろしく齒の根をガチ〳〵云はせ乍ら、蒼白の顏してスクミ上つてゐる。岩石も吹き散らすばかりの疾風頻りに吹き來り、其物凄き事例ふるに物なく、孫公は樹の根に確と抱へついて、其身の吹き散るのを辛うじて防いで居る。三人も黃楊の木の根元にペタリと匹垂つて、風の過ぐるを待つて居た。

湖水は俄に沸き返る樣を音がたつて、ブク〳〵〳〵と泡立ち初めた。暗夜なれ共湖面の泡立つ色は明瞭に見ゐて居る。暫らくすると、大入道の立つた樣に波の柱が彼方此方にムク〳〵と突出し、碎けては湖面に落つる其物音、實に凄じく身の毛も竦つ許りであつた。湖中の彼方此方より、青赤白黃抔の火の玉數限りも無く現はれ來り、長い尾を中空に引摺りブーン〳〵と呻りを立て、四方八方に向つて突進し來る。見れば玉杓子の樣な姿で、玉の處に色々といやらしき凄い顏がついて居る。此怪物は四人の側に集まり來り、頭上を前後左右に飛び廻れども、如何したものか身邊には寄りついて來ない。僅か一二間迄やつて來るのが精々であつた。

お愛「今晩は妙な夜で御座いますな。大蛇の神さん、色々の玉を現はし、我々一行の歡迎會を開いて御座らつしやるのでせう。ほんに氣の利いた神さんですこと、オホ、ヽヽ。火の玉さんのお蔭で、レコード破りの風もスッカリ止まつて了ひました。あの物凄かりしブク〳〵も水柱の大入道も、何處かへ沈沒して了つたと見ゐます。こ

れも全く孫公別の宣傳使樣の御神德で御座いませう。ねー虎さん、三公さん、宣傳使の御神德と云ふものは隨分にらい者で御座いますなア」

虎公「大蛇の奴、今三番叟を初めよつた處だ。之からが孫公別宣傳使のお骨の折れる處だ。もし宣傳使樣、如何で御座いますか。何時迄も木の株に抱きついて居つても木は物を言ひませんぞ」

孫公「いやモウ〳〵〳〵タ、、大變な事が初まりました。本當に愉快な……事で……御座いませんわい。如何も早神力の持ち合せが……無いものだから、斯んな場合には一寸面喰ふ樣な……男では……ありません」

虎公「ハ、、、、孫公別樣さは此處に控へて御座れば大磐石だ。なあ三公さん、貴方も安心でせう。先づ宣傳使に宣傳歌を謠つて頂き、大蛇の奴を言向和して頂きませうか」

三公「三公（參考）の爲めに一寸宣傳歌を試みて頂きませうか。もし〳〵孫公別樣、何卒一つ願ひやす」

孫公「これだから者の頭になると責任が加はつて困るのだ。平和の時は大變結構な樣だがこんな時に筒先に向けられるのは隨分辛いな……オット待てよ、大將は帷幄の中に畫策を廻らすのがお役だ。玉除けになるのは雜兵のする事だ。兎も角後は宣傳使が引受けるから三公さん、一つ初陣をやつて下さい。あの通り火の玉が刻々に殖にて來る。愚圖々々して居れば、敵に先鞭をつけられる虞があるから、一つ若い意氣に先發隊を勤めて下さいな」

三公『是非々々先生に願はなくちや、此戰闘は駄目です。戰はずして敵を呑むと云ふ氣概のある、三五教の宣傳使が神力の試し時だ。さあ〳〵意茶つかさずに先生やつて下さいな……虎公さん、お愛さん、さう願つたら如何でしようかな』

虎公『無論の事です。先登に立つて働くから宣傳使と云ふのだ。何卒孫公別様、お願ひ申します』

お愛『宣傳使様、宜しう御願ひ致します。一つ御神力を現はして下さいませ』

孫公『先登に出んから宣傳使と云ふのだけれどなア。にー詮方ない。そんなら一つ千變萬化の言靈の妙用を盡して、あの火の玉を一つも殘らず水底に蟄伏させて見せませう』

と、痩我慢を出し乍ら、震ひ聲になり宣傳歌を謠ひ初めた。

孫公『神が表に現はれて
千變萬化の言靈で
湖水の大蛇を言向ける
湖水に泛んだ火の玉よ
お前はそれ程三五の
神の教が怖いのか
一間先迄やつて來て
怖相に〳〵尾を下げて
チツとも寄つて來んじやないか　矢張りお前も智慧がある
神德高き宣傳使
孫公別の御前と
恐れみ謹み萎縮して
恐ぢ〳〵してるに違ひない
善と惡とを立別ける
此世を造りし大神の
任し給ひし神司
善の身魂を救ひあげ
惡の身魂を言向けて
五六七の神の御世となし

三公『是非々々先生に願はなくちや、此戰闘は駄目です。戰はずして敵を呑むと云ふ氣概のある、三五教の宣傳使が神力の試し時だ。さあ〳〵意茶つかさずに先生やつて下さいな……虎公さん、お愛さん、さう願つたら如何でしようかな』

虎公『無論の事です。先登に立つて働くから宣傳使と云ふのだ。何卒孫公別様、お願ひ申します』

お愛『宣傳使様、宜しう御願ひ致します。一つ御神力を現はして下さいませ』

孫公『先登に出んから宣傳使と云ふのだけれどなア。にー詮方ない。そんなら一つ千變萬化の言靈の妙用を盡して、あの火の玉を一つも殘らず水底に蟄伏させて見せませう』

と、痩我慢を出し乍ら、震ひ聲になり宣傳歌を謠ひ初めた。

孫公『神が表に現はれて
湖水の大蛇を言向ける
お前はそれ程三五の
一間先迄やつて來て
チツとも寄つて來んじやないか　矢張りお前も智慧がある
神德高き宣傳使
恐れみ謹み萎縮して
善と惡とを立別ける
任し給ひし神司
惡の身魂を言向けて
千變萬化の言靈で
湖水に泛んだ火の玉よ
神の教が怖いのか
怖相に〳〵尾を下げて
孫公別の御前と
恐ぢ〳〵してるに違ひない
此世を造りし大神の
善の身魂を救ひあげ
五六七の神の御世となし

神も佛事も人間も
草木の末に至る迄
天ケ下なる萬物は
機會均等主義をとり
世を立直す神の道
艮金神鬼門神
湖水に棲める大蛇ども
三五教にて名も高き
孫公別の言靈を
天ケ下には善惡の
鳥獸も虫族も
神の惠を均霑し
大小高下の隔てなく
殘らず枡掛け引き均らし
須彌仙山に腰を掛け
守り玉へる世の中じや
今から心を立直し
神德滿つる宣傳使
耳をすまして聞きとれよ
區別も無ければ敵味方

等の差別はない程に
火玉を鎭めておとなしく
慎み畏み聞くがよい
我は玉治別の神
黑姫さんの一の弟子
假令入岐の大蛇でも
見事甲斐性があるならば
孫公別の吹き捨つる
木葉微塵に踏み碎き
之が合點行たならば
迷ひの雲霧吹き拂ひ
尊き神の御教を
あゝ惟神々々
オットドッコイこりや違ふ
何程强い惡魔でも
ビクとも致さぬ某じや
一つ力を出して見よ
伊吹の狹霧に悉く
亡ぼし絶やすは目の前
心の底から改めて

孫公別の御前に
これ程事を細やかに
聞かねば聞かんで構やせぬ
早く返答を聞かしやんせ
國治立大神や
神素盞嗚大神の
湖水の底に潜み居る
あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ」

お詫をするが第一だ
分けて諭してやる事を
俺にも覺悟がある程に
孫公別の宣傳使
金勝要大御神
三柱神を代表し
大蛇の魔神に宣り傳ふ

と初めは恐相に震ひ聲に謠つて居たが、終にはド拍子の抜けた大聲を張り上げ謠ひ出した。孫公の歌終るや否や、獅子狼の幾萬匹一度に呻る樣な怪しき聲が四方八方から聞こえ出し、青赤黄等の火は彼方此方にペロ〳〵と燃えては消え、燃えては消え、又もや烈風吹き出し大地は揺り動き、如何ともする事が出來なくなつて來た。孫公は再び元の樫の樹の根株に確と喰ひつき身を震はし蹲み居る。

三公は黄楊の木の幹を片手で握り、烈風の中に立ち身体の中心をとり乍ら、湖面に向つて言靈を宣り初めた。

三公「八岐の大蛇の片割れと
大蛇の魔神よ能つく聞け
我事なるぞスッポンの
只一匹も殘らずに
我兩親の敵討ち

現はれ湖底に忍び居る
抑も大蛇の三公とは
湖水を棲處と致す奴
俺の側までやつて來い
生命をとつて呉れんぞと

心も勇み來て見れば
泡立つ波や水柱
レコード破りの强風に
何程企んで見た處が
そんな嚇しにビクついて
大親分となれ樣か
もう斯うなつて來た上は
さあ來い來れ早來れ
此處で一つやらうかい
力のあんまり强うない
子供嚇しの火の玉や
呂律も合はぬ呻り聲
地まで搖つて嚇さうと
そのやり方は古いぞや
人氣の荒らい熊襲國の
猪喰た犬の腕試し
後へは引かぬ俺の意地
借き生命の取り合ひを
此處には尊い宣傳使
孫公別も震ひつゝ

二人の喧嘩を見て御座る
虎公さんを初めとし
逃げ出す樣なお愛さん
何を愚圖々々して居るか
生命を捨てた三公は
物は一つも無い程に
いざ尋常に勝負せう
頭を下げて尾を振つて
貴樣の頭を三つ四つ
我兩親の無念をば
武野村の俠客
辨才天も恥らうて
スツカリ道具が揃ふて居る
早く來つて勝負せよ
最早此世に恐るべき
親の敵ぢや早來れ
それが嫌なら我前に
四つに這ふて謝れよ
此岩石で打ちたゝき
晴らして助けてやる程に

早く來れよ曲津神　　三公さんが待つて居る
あゝ惟神々々　　御靈幸はひましませよ」

と謠ひ終るや湖面は益々波高く荒れ狂ひ、火の玉は刻々に殖ゑ來りブン〳〵と呻りを立て、四人の殆ど身体のとゞく處迄數限りもなくお玉杓子の火の玉、攻めかけ來る其嫌らしさ、實に物凄き光景であつた。

（大正一一、九、一六、舊七、二五、北村隆光錄）

第一五章　救の玉（九七九）

お愛は立上り、宣傳歌を謠ひ始めた。

お愛『豐葦原の瑞穗國
國の八十國八十島は
國治立御體
神素盞嗚の御靈力
金勝要大神の
御靈の守らす國なれば
此三柱の大神の
御許しなくば何神も
此世に住むべき權利なし
三五教の神司
孫公別に從ひて
吾等は茲に曲神の
曲言向けて神國を
清く涼しく澄まさむと

現はれ出でし四人連　湖底に潜む曲神よ
如何に勢猛く共　此三柱い皇神の
許しなくして地の上に　如何でか安く住のぬべき
あゝ惟神々々　神の御霊を蒙りて
一日も早く片時も　とく速けく三五の
誠の道の御教に　まつろひまつれ醜大蛇
それにつき添ふ諸々の　醜の霊に宜り傳ふ
あゝ惟神々々　御霊幸はひましませよ」

と簡単に言霊を打出した。此聲に今迄の烈風は其勢を減じ、猛獣の唸り聲は漸く低く、遠く去り行き、湖面に泛びし諸々の怪物は、時々刻々に姿を減じた。されど容易に全滅しない。

茲に虎公は捻鉢巻をし乍ら、厳の雄健びふみたけびつゝ、大音聲を張上げて、詞涼しく言霊を發射した。

虎公「三千世界の梅の花　一度に開く時は今
大蛇の神よよつくきけ　きさまは餘程太い奴
太い許りか長い奴　エヂプト都に名も高き
春公、お常の兩人を　勿体なくも呑み喰ひ
平氣の平左で此湖に　住居するとは何の事
天地の神を畏れぬか　ここに現はれ來りたる
三公さんは春公や　お常の方の生みませる

珍の尊き御子なるぞ
早く姿を現はして
三公さんに打向ひ
武野の村の男達
虎狼や獅子熊も
小さくなつて逃げてゆく
醜き體を持つ上は
姿隱してゐるのだろ
早く此場に現はれて
早く悟りて天國の
汝心のあるならば
吾目の前にいで來り
前非を悔いて詫をせよ
虎公さんとはおれの事
おれの名を聞きや驚いて
お前も同じ畜生の
俺に恥らひ底深く
そんな氣兼は要らぬ故
善惡正邪の大道を
榮ゑを永久に樂しめよ

朝日は照るとも曇るとも
大蛇はいかに猛るとも
仕へまつれる吾々は
誠一つの言靈を
忽ち打出す宣傳歌
大海原は波たけり
此神力の活動を
早く心を改めて
誓ひを立てよ大蛇神
黒姫司に從ひて
月は盈つとも虧くるとも
二五教の大道に
いかで初心を變ずべき
直日の銃につめ込んで
天は轟き地はゆるぎ
山は忽ち裂けてゆく
見ない間に一刻も
善の大道に歸るべく
三五教の宣傳使
熊襲の國へ渡り來し

孫公別を始めとし　　三公、お愛や虎公の
四魂の身魂が今ここに　　現はれ來りて言靈の
大戰ひを宣示する　　あゝ惟神々々
神の心を諾なひて　　かゝる小さき湖を捨て
廣き尊き限りなき　　天津御空の神國へ
心も廣く昇り行け　　あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ」

と謠ひ了つた。されど如何したものか、湖面の怪はいろ〳〵と形を變じ、蛸入道や曲鬼、四つ目小僧など、數限りなく浮み來り、お玉杓子の形した火玉は幾百千ともなく唸りを立てゝ土手の如く集まり來り、四人の男女を十重二十重に取まいた。四人は青臭い、何ともいへぬ臭氣に鼻をつかれ、胸塞がり、腹痛み、眼くらみて、今や如何ともする事能はざる迄弱り切つてゐる。

いつの間にやら夜はカラリと明けてゐる。湖面より現はれ來りし怪物は一つ減り二つ減り、大陽の光線が地上を照す時には、怪物の姿は殘らず消え失せて、湖面は只紺碧の波が悠々と漂うてゐるのみであつた。

四人は池の片邊に端座し、昨夜の怪を話し合ひ乍ら、湖水の水に手を洗ひ、身を清め、次いで天津祝詞を奏上し終る時しも、木の茂みを分けて此場に現はれ來る一人の宣傳使があつた。よく〳〵見れば玉治別命である。孫公は飛立つ許り打喜び

孫公『コレは／＼玉治別さま。幾回となくお聲は聞かして頂きましたが、お目にかゝるは今が始めて、ようマア來て下さいました……モシ〳〵三人の方、之れが驍名高き

三五教の玉治別の宣傳使で御座います」

虎公、お愛、三公は嬉し涙にくれ乍ら、玉治別に向つて跪き敬意を表してゐる。

玉治「皆さん、隨分能く言靈がころびましたなア。大蛇の神、隨分いろ〳〵と面白い藝當を見せてくれたでせう」

虎公「あなたは夜前の光景を御存じて御座いましたか」

玉治「ハイ白山峠を一目算にかけ下り、先へ廻つて此森林に身をひそめ、あなた方の言靈戰を面白く觀覽して居りました。大變危ない所迄行きましたなア」

虎公「モウ少しの事で火の玉の鬼にくつつかれる所でしたが、不思議にも三尺許り近寄つて、それよりは、よう寄りつかなかつたのです。あれ丈の勢で如何してマアもう二三間といふ所がよりつけないのでせうか」

玉治「あなたの靈衣迄寄つて來たのですよ。靈衣の威德に恐れて、夫れ以上は近寄れなかつたのです。そうして大蛇の奴、まだ〳〵エライ企みをして居つたようですが、私は此木蔭より湖面に向つて鎭魂をして居りました。それが爲に猛烈なる大蛇の幕下、此山林に横行する、虎、獅子、熊、狼なぞの猛獸も、害を加ふるに由なく、何れも遠く逃げ去つて了つたのです。そうして孫公さんは孫公別とか云ふ立派な宣傳使になられたそうですなア」

孫公「ハイ、イヤモウ一寸臨時に頼まれましてやつて見ました。併し乍ら餘り甘く行きませぬので宣傳使といふ者はつらい者だとホト〳〵感心致しました。玉治別さまがお越しになつたのを幸ひ、私は只今より孫公別の宣傳使を返上いたします。どうぞお受取り下さいませ。イヤもう中々骨の折れた事で御座いました」

玉治「アハ、、、、誰に宣傳使を命ぜられたのですか。黒姫様からでも假りにお貰ひになつたのですか」

孫公「イエどうして〳〵、ここは共和國で御座いますから、國民一致選擧の結果、推されて宣傳使になつたので御座います。イヤ誠にモウうすい目に會ひました」

玉治「サア皆さん、茲に居つても仕方がありませぬ。此湖水には大きな浮島が三つ四つありますから、そこ迄行つて休息を致し、今宵は其島に渡り、一つ言靈戰をひらき根本的に大蛇の神を言向和せませう。サア參りませう」

と先にたつて、湖畔を進み行く。四人はハッと胸なでおろし、元氣頓に加はり、後を慕うて從いて行く。

（大正一一、九、一六、舊七、二五、松村眞澄錄）

第一六章　浮島の花（九八〇）

東西二十里、南北三十里に亘る此湖水の中に三個の浮島がある。そうして時々刻々に其位地を變じ、浮草の如く漂うてゐる奇妙な島であつた。玉治別は此島を近く引寄せんと、金扇を開き、打煽ぎ乍ら差招く。

玉治別「浮島にゐませる神よ心あらば
　寄り來りませ我れはあをがん
水の面に輕く浮べる此島は
　如何なる神のすさびなるらむ
島影にかくれひそめる曲神を

神の御稜威に救ひ照らさむ
現し世も又幽世も神の世も
皇大神のしらす御國ぞ
國治の立命の伊吹より
現はれますか、あはれ此島
玉の緒の命の限り玉治別は
世を救ふべく茲に來れり
玉治の別命は素盞嗚の
神の伊吹を受けつぎし神
惟神神の誓ひの深ければ

如何なる神も救ひ玉はむ
鬼大蛇虎狼や獅子熊も
神の水火より生れたる御子
吾れは今、神の御言を蒙りて
汝救はむとここに來れり
三五の神の教は世を救ふ
誠一つの玉治別神
我魂は如意の寶珠と輝きて
うみの底迄照らし行くなり
湖底にひそみ隠るゝ醜神も

浮かして救ふ神の正道
浮き沈み交々來る人の世も
神に任せば沈む事なし
スワボンの湖の底ひは深く共
神の惠の深きに若かず
いざさらば玉治別が言靈の
嚴の伊吹を開きてや見む
開け行く御代に扇の末廣く
榮ゑ〳〵よ海の底まで
三五の神の教の孫公が

神の司と詐りにけり。
詐りのなき世なりせば斯く許り
神は心を痛めざらまし
あゝ神よ、普く世人を救へかし
湖の底なる大蛇神迄
鬼大蛇、醜の健びの強く共
玉治別の魂に照らさん
曲魂も皇大神の御靈なり
ゆめおろそかに扱ふべしや。
來て見れば、茲に四人の神の子が

力限りに言靈を宜る
言靈の曇りはいよ〳〵深くして
湖の底まで通らざりけり
八千尋の底に潜める曲津神も
天津日影は仰ぎ見るらむ
松の島、竹の島より梅の島
三つの御靈の姿なるらむ
素盞嗚の神の伊吹の清ければ
あが言靈も清く鳴り行く
なり〳〵てなり餘りたる天敎の

神の御稜威ぞ尊かりけれ
木の花の咲耶姫の現はれて
曲に惱める人を救ひつ
何事も神の心に任しなば
世に恐るべき者はあらまし
千早振る、古き神代の昔より
神の心は變らざりけり
火と水は古き神代の昔より
色も變らず味も變らず」
玉治別はかく諭ふ折しも、湖面に泛べる美はしき一つの島、言靈の威力に感じてや

悠々として湖畔近く寄り來る。近寄り見れば、思ふたよりも廣き浮島である。玉治別は先頭に立ち、此浮島に渡らんとする時、いづくよりともなく、聲ありて

「待てしばし玉治別の神司
　此浮島は曲の變化ぞ
美はしき松生ふ島と見せかけて
　惱まさんとす曲の醜業
村肝の心を配れ、五柱
　曲の集へるこれの湖
素盞嗚の神の尊の生御靈
　われは言依別の神ぞや
言依の別命が現はれて
　玉治別に力添へつゝ
烏羽玉の闇夜をてらす日出別
　神命も今ここにあり
木の花の姫命の生御靈
　蚊取の別もかくれ來にけり
惟神神の御靈の幸深く
　湖底までも照らし行くなり」

と何處ともなく中空より聞にて來た。

玉治別はハッと首を下げ、拍手再拜、神恩を感謝し、寄り來る松島に向つて、聲も

涼しく言靈をうちかけた。
『神素盞嗚大御神
其生靈と現ませる
瑞の身魂の生靈
日出別の神人が
戰を守り助けんと
下り玉ひし尊さよ
神の守りは目のあたり
我言靈のつゞく丈
仁慈無限の大神の
木の花咲耶姫神
蚊取の別の宣傳使
言依別の神司
我等一行の言靈の
天空高く翔らせて
あゝ惟神々々
玉治別は勇み立ち
誠一つを楯となし
深き心を四方の國
青人草は云ふも更
大蛇の末に至る迄
今浮島と現はれし
神の道には歴程も
清けき島と見せかけて
謀りに謀る邪しまの
あゝ松島と現はれし
神に賛うた魂を
沈ひ清めて天地の
元の姿に立ち返れ

これの湖水にひそみたる
救ひ助けておくべきか
醜の大蛇よよつく聞け
詐り汚れなきものぞ
吾等を誑かり惱めんと
汝の心ぞ憐れなり
醜の靈よ今よりは
此清らけき湖に
神より受けし瑞御靈
いかなる清き靈でも

曇れば石に若かざらめ　玉治別が眞心を
こめて汝を諭すなり　あゝ惟神々々
神の大道に早歸れ　神に歸りし靈なら
祈らずとても皇神は　汝が罪を赦しまし
命と榮にと喜びに　充ち足らひたる神國に
安く救はせ玉ふべし　玉治別の宣傳使
言靈茲に宣り了る　あゝ惟神々々
御靈幸倍ましませよ』

と謠ひ了るや否や、今迄目の前に現はれたる此島は、グレンと轉覆した遂蹌に、白と赤とのダンダラ筋の鱗を湖面にさらし、見る間に荒波を立て、湖中深く沈んで了つた。其時の光景は實に凄じきものであつた。

又もや一つの島、悠々として此方にうかび來る。よく〳〵見れば、島一面に黑き細き竹が密生してゐる。其竹の間より花を欺く妙齡の美人、三柱現はれ、優しき手をさし伸べて、早く來れと、口には言はねど、其形容に現はし、手招きを切りにしてゐる玉治別は以前の松島に懲りてゐるから、容易に動かず、兩手を組み、此島に向つて、鎭魂を修じてゐる。島は追々湖畔に近よつて來た。以前の女神は竹藪をぬけ出で、浮島の水打際に立つて、ニコヤカに玉治別一行の姿を見つめてゐる。

玉治別『竹島に乘りて寄り來る神人の
姿を見れば心榮にぬ
さり乍ら如何で心を許さんや

われ松島の怪しきを見て
怪しきは此れの竹島いかにして
三人乙女の現はれにけむ
素盞嗚神の尊の生みましゝ
三つの御靈に似ましけるかな
小波の中に漂ふ竹の島
三人乙女の影美はしき」

お愛は又謠ひ出した。

お愛「有難やあら尊やと伏し拜む
神の姿の美はしき哉
素盞嗚の神尊の分御靈
今わが前に現れましにけり
惟神神の大道を踏みしめて
瑞の御靈の道を守らむ
三つ御靈、五つの御靈と謠共に
守らせ玉ふ筑紫神國
天敎の山を降りし八島別
神の命のわれは娘ぞ」

と謠ひ終り、三人の女神に向つて伏し拜む。女神の一人は聲も淑やかに

「眞心をつくしの島の此湖に

世人の爲に來ります君
入島別神命の御裔ぞと
聞くわれこそは嬉しかりけり
われこそは神世を松の姫命
汝が心の榮にまちつゝ
榮にゆく神の御國に末永く
いや榮にませ愛子の君よ」

お愛「有難し瑞の御靈の現はれて
我身の曇り晴らし玉ひぬ
虎若の彦命の我夫を

いや永久に守りませ君」

次なる女神、又謠ふ。

「愛子姫、汝が命は建日向
別命の珍の御子かも
入島別神の命は天敎の
山に登りて榮にましけり
敷妙の神命の汝が母は
今ヒマラヤの山にましける
ヒマラヤの山より高き親の恩
ゆめ〳〵忘れ玉ふまじきぞ」

お愛、之れに答ふ。

「敷島の大和心のあらん限りは
　神の大道に進み行かなむ
父母の神命の御心に
　反きし事の歎かはしきかな
惟神神のまに〳〵進み行く
　我過世こそ不思議なりけり
久方の雲井の空を立ち出でゝ
　武野の郡にわれは暮しつ」

三人目の女神又謠ふ。

「三五の神の教の孫公さん
　大蛇の神は消にましにける
いざさらば心の大蛇を言向けて
　誠の道に進み行け君
惟神神の屋方の三公よ
　汝が父母は神國にあり
世の中に神の御目より眺むれば
　仇も味方もなきものぞかし
此湖に汝が仇のひそむとは
　よくも迷ひし汝が心ぞ

村肝の心の雲を吹き拂ひ
　照せたきもの月の教を
玉治の別命の神司
　とく行きませよ火の國都へ
火の國の都の空に黒曇の
　かゝるを見れば忌々しかりけり
いざさらば三人乙女は立ち去らむ
　五人の人よ早歸りませ』
といふかと見れば、島諸共に何處へ行きけん、跡形もなく、あとには紺碧の湖面に、波穏かにうねつてゐる。

是より玉治別一行は此湖の曲津神を歸順せしむべく、皇大神に請ひのみまつり、一日一夜祈願をこらした。忽ち湖水は二つに分れ、美はしき女神の姿となつて五人に無言の儘、恭しく拜禮し乍ら、忽ち雲を起し、悠々として天上高く昇り行くのであつた。之れは此湖にひそみし巨大なる三頭の大蛇、神の靈德に依つて、三寒三熱の苦をのがれ、忽ち神と化し、美はしき女神の姿となつて、天上の國に救はれたのである。

茲に玉治別は一行と共に、再び白山峠を越に、熊襲の國の三公が館に立寄り、一夜を明かし、急いで火の神國さして進み行くのであつた。　惟神　靈幸倍坐世。

（大正一一、九、一六、舊七、二五、松村眞澄錄）

君に誠意と親切あらば　決して僕をば招いて呉れな
教務に忙はしい僕の身を　君に何程覺識が
達してゐると誇るとも　現に少さい豫言まで
外つれる樣では仕樣がない　君も少しは魂の
正邪を目覺したがよい　君の教が世の中に
若しも宣傳されたなら　我國體は言ふも更
世界萬國暗闇だ　獅子と虎との魂が
現はれたのでは有るまいか　僕はそうだと認めてる

第三篇　火の國都（一七三）

第一七章　霧の海（九八一）

青葉は薫り、霞は迷ふ荒井ケ岳の絶頂に腰打かけて、四方を見はらし、雑談に耽つてゐる三人の男女があつた。餘り風もなけれ共何となく朝の空氣は涼しい。あちら此方に煙ともつかず、霧ともつかぬ靄が大地一面に閉ぢ込め、其中より浮き出た樣にコバルト色の山岳が現はれてゐる。

徳公「モシ／＼宣傳使樣、何といゝ絶景ぢやありませんか、日中はズイ分苦しいですがこう朝霧に包まれて、涼しい空氣に當り、四方を見下す氣分は、丸で地上の一切を掌握した王者の樣な雄大な氣分が漂うて來るぢやありませぬか」

黒姫「實に雄大な景色ですなア。火の國の都はどの邊に當りますか」

徳公『此れからズット西に、うす黒くうき出た様な山がありませう。それが火の國の都の西に聳ゑてゐる花見ケ岳と云つて、火の國第一の名山で御座いますよ。あの東に見ゑるのが火の國ケ岳、其少し北へよつてゐる絶頂の少し浮いて見ゑるのが向日山それからズット北にうすく霧の中から覗いてゐるのが白山峠です。其外の山々は全部霧の海に沈没して居りますから、見らしません。此霧がサラリと晴れようものなら、それこそ天下の壯觀です。花頂山、天狗ケ岳、越の山、春山峠、志賀の山などと、隨分立派な青山が點々してゐます。其間を縫うてゐる火の國川は、天の棚機姫が布を晒したように蜿々として火の國の原野を流れ、ゑも言はれぬ光景です。そうして少しく西南に當つて龍の湖といふ隨分大きな湖水がありますが、それも生憎霞の爲に包まれてゐます、それから火の國都の名物、五重の塔が霧のない時は、うつすりと目に映ります。それを見る度に、何ともいへぬ氣分になつて、眠たくなりますよ』

黒姫『徳さん、隨分あなたは地理に詳しい方ですなア。そう云ふお方に案内をして貰へば大丈夫です』

徳公『乍併此荒井峠は其實、御代ケ岳といふのですが、いつも山賊が出て荒つぽい事をするので、誰いふとなく荒井峠と綽名がついたのです。一名は生首峠とも云つて此峠には生首の絶ゑた事のないといふ危險區域です。此徳公さんは地理には精通し且つ豪膽者だといふことを、三公の親分が知つてゐますから、抜擢して御案内に立てと、命じたのですから、何事があろう共此徳さんのゐる限り大丈夫ですから、御安心なさいませ。假令泥坊の千匹万匹、束になつて押し寄せ來る共、敵一倍の力を

發揮し、縱横無盡に切り立て薙ぎ立て追ひ散らし、敵を千里に卻けて、御身の御安泰を守ります」

黒姫「オホ、、、隨分口の勇者ですなア」

徳公「ソラそうです共、言靈の幸はひ助け生くる神の國ですもの、勇めば勇む事が出來てくる、悔めば悔むことが出來てくるのは天地の眞理、言靈學上の本義ですから、力一杯强いことをいつて、荒井ケ岳の曲神を慴伏させる徳公が一厘の仕組、實に勇ましき次第なりけりだ、アハ、、、」

黒姫「オホ、、、」

久公「オイ徳、モウ夜が明けてゐるぞ。何寝言を云つてゐるのだ。一つ手水でも使つて來い」

徳公「オイ久、貴樣こそ寝言を云つてるのだらう。そうでなくちやそんな馬鹿な事が云へるかい。よく考へて見よ。こんな高山の絶頂に手水を使へといつた所で、水があるかい。それだから貴樣は寝言を云つてるといふのだ」

久公「形体ある水で使へと云ふのだない。無形の清水で手水を使へと云つたのだ。言靈の幸い助け生くる國だから、俺がかう云つたが最後、此山頂から俄に清水が滾々としてわき出すかも知れないのだ。餘り茶々を入れてくれなイ」

徳公「茶々を入れと云つたつて、わかす水もないぢやないか」

久公「俺が一つ魔法瓶から茶々を出して呑ましてやらうか、それッ！」

といひ乍ら、前をまくつて徳公の方に向つて龍頭水の如く噴出する。

徳公「エ、汚ねい事をすな。此親分にして此子分あり。いつも下らぬ事ばかり見聞して

ゐやがるもんだから、そんな不作法な事を平氣でするのだ。山には山の神さまがあるぞ。すべて山の頂きは人間に假へたら、頭も同樣だ。頭に小便をひりかけるとはチッと無道ぢやないか」

久公「俺のは小便だない、バリと云ふのだ。餘り貴樣がイバリよるから、一つバリ水をさしてぬくめてやらうと思つたのだ。餘りメートルが上りすぎてをるからなア。バリの洗禮を施して貴樣の心を、サッパリ荒井峠だ、ウッフ、、、」

德公「黑姫さん、常の習ひが他所で出るとかいひまして、日常の教育が不用意の間に現はれるものですなア。本當に仕方のない奴です。虎公親分も斯んな代物を飼つて居るのは隨分大体ぢやありますめい」

久公「コラ默つて居れば、口に番所がないと思つて非常にバリ嘲弄を恣にしやがるモウ承知せないぞ」

德公「貴樣は貴樣の方からバリかけたぢやねいか。俺がバリするのは、當然だ。これでも三公の身内に於ては、德さんと云つてバリ〳〵者だから、グヅ〳〵吐すと、笠の臺が洋行するやうな目に會はしてやらうか」

久公「煩雜な議論をして居るよりも、手取早く自由行動だ。サア來い勝負！」

德公「ハッ、、、キウ〳〵と取つゝめられ、キウ策を案出して、キウに威張り出しやがつたなア。マアちつと冷靜に物を考へて見よ。親分同志は和解してゐるぢやねいかワカい者同士が斯んな所で喧嘩しちや濟まねいぞ、茲に三五敎の宣傳使が見て御座る。無抵抗主義を貴樣は何と思うてゐるか」

黑姫「モシ〳〵お二人さん、どうぞ爭ひはやめて下さい。見つともないぢやありませぬ

か」

徳公「徳別久行列車が黒姫オットドッコイ、コリヤ失敬、黒煙を吐いて、火の國の大原野を疾走する所ですからなア、アハ、、、」

久公「久々如律令、　とうかみゑみため、拂ひ玉へ清め玉へ、　南無　惟神　靈幸倍坐世、一時も早く徳久列車が勝利の都へ安着致しまする樣、歸命頂禮、願望成就、無上靈寶、珍妙如來、守り玉へ幸はひ玉へ、ウッフ、、、」

斯かる所へ四五人の男、一人のかよわき女を伴ひ、登つて來た。

徳公「いよ〳〵泥さんの御出現だ。

此山働く泥坊が　長い大刀振りまわし

オイ〳〵貴樣は旅の奴　お金をスッカリおれの前

出すか出さんかコリヤどうぢや　出さぬといつたら此通り

おゞせば久公は泣き出し　金を出せならだしもする

供をせいなら供もする　命ばかりはお助けと

いうても歸らぬ久公を　憐れや泥坊がバッサリと

切つてすてたる恐ろしさ　あゝ　惟神〳〵

叶はんならば久公よ　一時も早く逃げ出せよ

三十六計の奥の手は　にげるに若くはない程に

かけがひのない其命　もしもバッサリやられたら

貴樣の内のおなべ奴が　吠面かわいて喧しう

近所に迷惑かけるだろ　アハ、、、アハ、、、」

久公『コリヤ德、何を吐きやがるのだ。泥坊が怖くつて、俠客が出來るかい。おれを誰だと思つてゐやがるのだ。蟒の久公さんと云つたら、俺のことだぞ。昔は白山峠に岩屋戸を構へ、七十五人の子分を引つれ、往來の人間を眞裸にし、經驗をつんだ惡逆無道の蟒の久さんの成れの果てだ……と云ふのは俺ではない。其久公の名をあやかつた久さんだから、チッとは泥的の匂ひ位は保留してるのだから、餘りバカにして貰ふまいかい』

五人の男は久公の法螺を聞いて、本當の泥坊の出現と思ひ、顏色をサッとかへてゐる。一人の女は度を失ひ、

女『あゝ如何しませう、泥坊が出ました。兄いさん助けて下さいな』

男『人間は覺悟が第一だ。荒井峠に山賊が出るから、モウ少し遲く、夜が明けてから登らうと云つたのに、貴樣が喧しく急き立て、夜中立をして來たものだから、こんな怖い目に會ふのだ。これも自業自得とあきらめて眞裸となり、命丈助けて貰うやうにするのが第一の上分別だ。オイ皆裸になれ、泥さんの方から請求されない內に、綺麗サッパリとおつ放りだす方が得策だ。人の性は善だから、下着の一枚位は返してくれるかも知れぬぞ』

と小聲に一同に向つて囁いてゐる。久公は此囁聲はチッとも耳に入らなかつた。餘りの驚きに耳が鳴つてゐたからである。

男『私は火の國の者で御座いますが、俄に急用が出來まして、男女六人連れ、此坂を越して參りました。どうぞ荒いことをせないように賴みます。其代りスッカリ着物を脫いで渡しますから……』

久公「お前は人の着物を脱がすのが商賣だから無理もないが、どうぞ今日は日曜にしてくれ。賴みぢや。三五敎の黒姫さんのお供をして火の國へ行くのだから、こゝで眞裸にせられちやア、本當に迷惑だからなア。一枚だつて渡すこたア出來ないから、どうぞ諦めて下さい。是でも男一匹の俠客だから、裸一貫の大男だから……」

男も亦驚きの爲に、耳もろくに聞ねなくなつてゐた。

男「エ、何と仰有います。一枚も渡さんと仰有るのですか。せめて下着なつと下さいな裸一貫とか二貫とか仰有いましたが、裸になつちや道中が出來ません。又こんなか弱い女も居るのですから、そこはお慈悲で見のがして下さいませ」

外五人の男女は目をふさぎ、耳をつめ坂路にふるひ〳〵踞んでゐる。

德公「アハ、、、臆病者同士の寄合ぢやなア……コレ〳〵旅の御方、吾々は決して泥坊ぢやありませぬよ。大蛇の三公さんの子分だ。弱きをくじき、强きを助けるに云ふ都合の好い俠客だから、マア〳〵安心なせい。命は取つても着物迄取らうとは云はねいから安心しなせい。今の人間は體よりも着物を大切がるから、大切な着物の方を助けて上げやせう、アハ、、、」

黒姫「コレ〳〵德さん、久さん、冗談もいゝ加減にしておきなさい。旅のお方が本當の泥坊だと思うて、あの通り震うてゐられるぢやありませぬか。そんな肚の惡いことをいふものぢやありませぬよ」

德公「いかにも御尤も千萬、恐れ入谷の鬼子母神呆れ蛙の面に水、つら〳〵思んみれば見ず知らずの旅人を捉へ、いらざるおどし文句を並べたて、誠に以て不都合千萬、平に御容赦願上げ奉りまする……コレ〳〵旅のお方、吾々は決して泥坊ぢやあり

ません。三五敎の信者だから安心して下さい。實の所は此方の方から、お前さん達を泥坊の群だと早合點して、雨蛙の胸元のやうに、ペコ〳〵とハートに波を打たせてゐた、餘り强くない代物ですよ。疑心暗鬼を生ずとかや、互に心の縺れから、せいでもよい心配をしたり、させたり、らつちもねいことで御座んした」

男「あゝそれで落着きました……オイお前達、モツ心配するには及ばん、氣を確に持てこんな弱いことで荒井峠が越されると思ふか、假令泥坊の千匹萬匹押寄せ來る共、此鐵公が鐵拳を揮つて、泥坊の群に縱横無盡に飛込んだが最後、さしも暴惡無道の泥坊の群も、風に木の葉の散る如く、先を爭ひ、ムラ〳〵バッと逃げ散つたり。にげる奴には目はかけず、寄せ來る奴は片つぱしからブンなぐり、素首ひきぬき、股をさき手をむしり、子供の人形箱のやうに致してくれんは案の内、ヤア面白し〳〵げに名にし負ふ荒井ケ峠の勇將と、名を萬世に轟かす、比ひ稀なる豪傑なり……と云ふ樣なものだ。マア〳〵木ッぱ共、否臆病者共、此鐵公さんに從ひ來れ、オッホーン」

黑姫「アハ、、、又久公さんの二代目が出來ましたなア」

德公「久公の副守護神が憑依したのですよ。アハ、、、」

旅の男は五人の男女を差し招き、法螺を吹き、空威張りし乍ら、ヤッパリどこかに薄氣味が惡いと見て、下り坂になつたを幸ひ、こけつまろびつ、立板に砂をブチヤけたように、バラ〳〵〳〵と命カラ〴〵逃げて行く。

（大正一一、九、一七、舊七、二六、松村眞澄錄）

第一八章　山　下　り（九八二）

黒姫は四方の風景を眺めながら

黒姫「見渡せば四方は霞みて霧の海
　我脊の君はいづくなるらん
霧の海浪も靜かな火の國に
　コバルト色の山は浮きつゝ
村肝の心を荒井ケ岳に來て
　四方を見晴らす我ぞ樂しき
眺むれば火の國山や向日山
　花見ケ岳の姿床しき
麗しき霧の漂ふ火の國は
　心も清く塵も留めず
野も山も霧にかすみて隱れゆく
　我脊の君をまゝい往くかな
山々は霧に沈みて見ねざれど
　高山彦の頭見ねつゝ
徳公や久公さんを伴ひて
　實に面白き旅をなすかな
旅人を泥坊なりと見違ねて

胸とゞろかす二人の男
旅人は徳と久との姿見て
顔色かへて戰きにける
今暫し心の駒に鞭うつて
進みて往かん火の國都へ
惟神神の敎に從ひて
筑紫の島を廻る樂しさ
神國に生れ出でたる我なれば
夜晝神の道を進まん
天津日の影も霞に包まれて

風も靜けき荒井岳の尾」
徳公は尻馬に乘つて謠ひ出した。
徳公「黑姫の後に從ひ來て見れば
荒井ケ岳に泥坊が出る
泥坊と取ちがへたる久公が
肝玉取られ腰を抜かしつ
腰抜けの弱い男と道連に
なつた迷惑徳さんの損
急坂を泡吹き乍らきう〳〵と
久公の奴が登り往くかな

惟神　神が表に現はれて
　火の神國を霧海にする
山々は霞の帶をひき締めて
　我往く姿を待ちつつゞ居る
慢心の山の頂上に登りつめ
　困りきつたる久公の顏」
久公は負ぬ氣になつて又謠ふ。
久公「。。トク頭病見たよな禿た山の上に
　徳公の野郎が慄ひ居るかな
口許り十年先に生れたる

男が屁理窟トク〳〵として言ふ
。。トク心の往く迄脂とつてやろ
　不道徳なる徳公のため
野も山も霞や霧に包まれて
　春と秋との中に道ふ
春か非ず秋かと見れば秋ならず
　力も夏の朝ぼらけかな
朝霞棚曳そめて山々は
　浮しが如く見ねにけるかな
あのやうな大きな山を浮かす奴

霧か霞か白雲の空
浮いて居るやうに見ねても花見山
根は火の國の霧にかくれつ
此山は荒井ケ岳と唱ふれど
靜かな風が吹き渡るかな
虎公の我親分は今いづこ
頼りも白山峠越ゆらん
親分がお愛の方と諸共に
胸突き坂に汗しぼるらん
三公の親分よりも虎さんは

勝つて足のまめやかな人
今頃は三公さんが尼古垂れて
徳よ〳〵と弱音吹くらん
おい徳よ早く此場を立ち去つて
弱い親方訪ね往くべし
かうなれば黒姫さんの御供は
久公一人で事は足るなり
心から嫌な徳公と山登り
一しほ汗が深く出るなり
屋方の村の三公が　乾兒の端に加へられ

朝から晩迄門をはき
下女のお鍋に肱鐵を
性こりもなくつけ狙ふ
三五教の宣傳使
するとは實に案外ぢや
俺は立派な地理學者
二百十日の風のよに
そこ等あたりで金を借り
深い罪をば重ねつゝ
高い山坂登るとは

褌迄も洗はされ
朝な夕なに喰はされ
腰扱け男が現はれて
黒姫さんの御案内
荒井峠へやつて來て
なんぢやかんぢやと法螺を吹く
吹き散らすのはよけれども
未だに尻をふかぬ奴
身の程知らずの徳さんが
是こそ天地轉倒だ

鼻ばつかりを高うして
仲間の奴に嫌はれて
體よき辭令にほり出され
ほんに思へば氣の毒な
心を千々に碎けども
助けるよしも夏の空
姿かくしてなき渡る
今目の前に泣いて居る
なつた俺こそ因果もの
困つた奴の道連れと

あんまり法螺を吹く故に
黒姫さんの案内と
此處迄出て來た馬鹿男
何とか助けてやり度いと
腐りきつたる魂を
青葉の影に身を潜め
山杜鵑は外でない
こんな男と道連れに
黒姫さんも嘸やさぞ
愛想を盡かして腹の中

揉んで厶るに違ひない
黒姫さんもやり切れぬ
目につくないば逸早く
捨て、往かうと思へども
いづこも同じ霧の海
厄介至極の至りなり
善言美詞の御教を
黒姫様よ徳公よ
お前の肉体守護する
無禮の言霊噤つた

こんな男に狙はれちや
どこぞそこらに掃溜が
惜し氣もなしにぽし〳〵と
山は霞に包まれて
捨て場さへなき困り者
オツトドツコイ言霊の
忘れて居つたか待て暫し
今云ふたのは俺だない
副守の奴が憑依して
それにてつきり違ひない

腹を立てなよ神直日
あつさり見直せ聞き直せ
神に敵する仇はない
御霊幸はひましませよ
月は盈つとも闕くるとも
霧に包まれ沈むとも
黒姫さんのお供して
親分さんに頼まれた
屁込む譯には往かないぜ
足に油を濺ぎつゝ

心も廣き大直日
人は神の子神の宮
あゝ惟神々々
朝日は照とも曇るとも
火の國都は十重廿重
否でも應でも我々は
送つて往かねばならないぞ
義理を思へば今此處で
も一つ腕に撚をかけ
山野を渡る膝栗毛

心の駒に鞭うつて　　お前と俺とは睦まじう
手を引き合ふて往かふぢやないか　あゝ面白い〳〵
東の雲が晴れて來た　　今吹く風は東風
我言靈は火の國の　　都に清く響くだらう
高山さんも今頃は　　神德無双の久公が
宜る言靈に耳澄ませ　　生神さんが出て來ると
酒や肴を用意して　　待つてゐるに違いない
これも矢張黒姫の　　神の司のお蔭ぞや
サア〳〵往かうサア往かう　　餘りの長い休息で
尻に白根が下りさうだ　　いづれ往かねばならぬ道

進めや進めいざ進め　　德公さんは先にゆけ
黒姫さんは殿だ　　久公さんは中に立ち
中取り臣の役となり　　さしもに險しき坂道を
苦もなく下り往きませう　　あゝ惟神々〳〵
御靈幸はひましませよ」

と謠ひながら立ち上る。黒姫は德公を先に立て、壁を立てたやうな急阪を一足々〳〵指に力を籠めて下り行く。

德公は一足一足力を入れながら、さしも名題の急阪荒井峠の西坂を、一行の先に立ち謠ひ乍ら下りゆく。

德公「青葉を渡る夏の風　　霧か霞か知らね共

一間先は分らない　だん〳〵おち込む霧の海
ウントコドッコイ黒姫さん　足許用心なさいませ
外の峠と事變り　火の國一の急阪だ
一方は斷崖絶壁だ　一方は深い谷の底
もし踏み外した其時は　かけがいのなきこの命
さつぱりジャミにして仕舞う　久公の奴も氣をつけて
一歩々々爪先に　心を配つて下りて來い
もしも途中で一人でも　怪我でもしたらドッコイショ
ウントコドッコイ親方に　何うして云ひ譯立つものか
黒姫さんのお供して　此よな深き坂道で

命を捨てゝは引き合ぬ　おい〳〵此處が一の關
兩手で岩をつかまへて　目を寒ぎつゝ足探り
そつと傳ふて下りて來い　あゝ〳〵きつい難所だな
こんな所を何として　先の女が易々と
登つて來たのかドッコイショ　不思議になつて耐らない
黒姫さんは年寄だ　心を鎭めてそろ〳〵と
足に力を入れながら　左の手にて杖を持ち
右手に岩をば摑みつゝ　靜にお下りなさいませ
ア、〳〵危ないもう些し　下つて行けば緩やかな
安全無事の道がある　其處へ行く迄ドッコイショ

どうしても心は許されぬ
火の國都にあれませる
合せる顔が無い程に
御靈幸はひましまして
無事に下らせたまへかし
我等は神の子神の宮
矢張人の身をもつて
心を配り氣をつけて
一日も早く火の國の
行かねばならないドッコイショ　黒姫さんは何として

もしも不調法した時は
高山彦の神さんに
あゝ　惟神々々
此急阪を恙なく
神は我等と共にあり
とは云ふもののドッコイショ
神さん氣取りにやなれないぞ
此難關を辷り越に
花の都へウントコショ

それ程默言つて御座るのか　些とは何とかドッコイショ
歌なと唄ふて下しやんせ　私ばかりが燥やいで
聲を涸して居た所が　オット危ない石がある
根つからドッコイはづまない　其處には鏡の岩がある
皆さん氣をつけなさらんと　鏡の岩は滑らかだ
是から向ふ一二町　鏡のやうにドッコイショ
光つて辷る坂の道　此處が第二の難關だ
あゝ　惟神々々　叶はぬか知らぬが久公が
屁古垂れよつてドッコイショ　さつぱり啞になりよつた
何程無言の業ぢやとて　それだけ濕つちやドッコイショ

女に劣つた腰抜けと　云はれた處でウントコショ
云ひ譯する道あらうまい　ほんに困つた弱虫だ
困つた腰抜男だな　オットドッコイ待て暫し
善言美詞のヤットコショ　言靈車が脫線し
濟まない事を云ひました　あゝ　惟神　々々
神の心に見直して　久公怒つて下さるな
お前が賣出す言靈を　俺が買うたるばつかりだ
賣つた喧嘩をどうしても　買はねばならぬ男達
ウントコドッコイドッコイショ　妙な所へ力瘤
入れる男と思はずに　何卒見直し聞直し

ガラ〳〵〳〵アイタタッタ　こう〳〵腰の骨打つた
アイタタッタ神樣の　罰が當つたちやあるまいか
口はドッコイ禍の　門ぢやと聞いて居つたれど
まさかにこんなウントコショ　事になるとは夢にだに
思はなかつたドッコイショ　も些し下ればドッコイショ
緩勾配の道がある　其處でゆつくり憩まうか
あゝ　惟神　々々　御靈幸はひましませよ」
と謠ひながら下り行く。

（大正一一、九、一七、舊七、二六、加藤明子錄）

第一九章　狐の出産（九八三）

三人は緋緩勾配の坂道にかゝり、甦き返つた樣な氣分になつて、宣傳歌を謠ひ乍ら
ポツ〳〵と進み行く。道の傍に滾々として清水が湧き出て居る。天の與へと三人は
飛びつく樣にして交る〴〵手に掬ひつゝ喉を霑はした。

徳公『旅人の生命ゝゝふ清水かな
滾々と水の御靈の湧き出でにけり
あゝうまい、うまいと掬ぶ清水哉
汗までが姿を隱す清水かな
喉笛の調子を直す清水かな

此清水尊き神の恵みかな
有難し尊し何も岩清水』

久公『おい、徳、隨分水々々と能く嘲るじやないか。それほど貴樣水が有難いか。此坂を
降つて少しく左へとれば龍の湖があるから、そこへ飛び込んで死ぬ迄飲むと宜い
わ一杯々々手に掬ふて飲んで居るより埒が宜いからな。俺も一つ此清水で歌句つて
みやうか』

徳公『風流を知らぬ貴樣に如何して俳句が出來るものかい』

久公『何、俺の名句を能く聞け！
岩清水徳公の餓鬼の生命かな
餓鬼達が集まり來たる清水かな』

德公「アハ、、、もつと云はないか。もうそれで種切だなア」

久公「…滾々と湧き出す種や岩清水
云ふよりも云はぬがましと口を詰め
柚よりも味の良くない清水かな
湧き返る胸をば冷す清水かな
此清水德公の腹に虫がわき」

德公「馬鹿にするない。水臭い事ばかり柚じやないか」

久公「きまつた事よ。水の御憲の致を傳ふる宣傳使のお供だないか」

黑姫「…掬ふ手に惠の露や岩清水
滾々と盡きぬ生命の清水かな
何時までも涸るゝ事なし岩清水
高山の胸より湧きし清水かな
高山を通れば樂し岩清水
此水や神の惠の生命水
岩清水三五の月の光りかな
德、久が水掛論の干ぬ眞名井
高山の清水や殊に味の良き
此清水我春の君に飲ませ度し
湧き出づる清水も神の惠かな
水々し若い男の水喧嘩

水にさへ根もなき喧嘩の花が咲き
水晶の靈やこれの岩清水
眞清水や生命の親と伏し拜み
水入らぬ二人の仲に水喧嘩
水臭い心を嫌ふ瑞御靈
此水や末には廣き海に入り
高山の水の甘さは誰も知らず
黒姫の心を洗ふ清水かな
阪道の疲れ養ふ清水かな
又汗の種ともならん岩清水

眞清水を掬ぶ手先や霧の立つ」

斯く三人は道の傍に腰うち卸し駄句りつゝある處へ、慌しくやつて來た一人の男がある。男は腰を屈め乍ら

「もし〳〵旅の御方樣、一つお願が御座います。何卒聞いては下さいますまいか」

黒姫「何事か存じませぬが、妾達の力に叶ふ事ならば承はりませう」

男「早速の御承知、有難う御座います。私は火の國の者で常助と申す百姓男で御座います。熊襲の國の建日の館へ參拜せんと、女房のお常を伴ひ此坂をエチ〳〵と登つて參りました處、まだ七月よりならない女房が俄に陳痛が來ると申しだし、路傍の木蔭に腹を痛めて七顚八倒苦悶をつゞけて居ります。何卒貴女樣の御神力によつて、安産をさせてやつて下さいませ」

黒姫「それは御心配で御座いませう。及ばぬ乍ら御世話をさして頂きます……これ〳〵二人の若い衆、水筒に水を一杯盛つて下さい。お産の時に使はねばなりませんから……」

徳公「ハイ、承知致しました。スウキートハートの結果、赤坊を腹に仕込んで到頭水筒の御世話に預ると云ふ妙な因縁ですなア。私も未だ嬶を貰つてから間が無いので、出産の狀況を目撃した事が無い。これやまア、都合の宜い事だ。一つ見物さして貰ひませうかい。なあ久公、何と云ふても人間が一匹小さい○○から飛びだすんだから、隨分六かしい藝當だらう。屹度見る丈けの價値はあるよ」

久公「……」

黒姫「これ徳さん、出産と云ふものは大切なものだから、靜かにせないと産婦が逆上すると大變だから、暫らく沈默して居て下さいや」

徳公「委細承知致しました。これ常助さん、お前の奥さんは何處で呻つて居るのだ。早く案内しなさい。萬一、赤坊が出にくがつて居つたら、俺が後に廻つて力一杯腰なり、尻なりをブン毆つて叩きだしてやるから安心しなさい」

常助「そんな無茶をしたつて子は生れるものじや御座いません。却て産婦が氣をとり失ひ難産を致しますから、何卒手荒い事はせぬ樣に賴みます」

黒姫「常さん、安心なさいませ。此黒姫が何もかも呑み込んでゐますから大丈夫です。さあ早く參りませう」

常助「ハイ、有難う。御案内致します。斯うお越し下さいませ」

と路傍の草道を二三十間ばかり踏み分け進んで行く。黒姫も一歩々々氣をつけ乍ら難

草の中を探りつゝ行く。

徳公「何ヒマアにらい叢だないか。こんな處でお産をする奴ア碌な奴じやあるまい。河原乞食か、山乞食じやなくちや宿なし坊か、一体合點の往かぬ代物だないか」

黒姫「これ、徳さん、お默りなさい。産婦に障りますよ」

徳公「ハイ、承知致しました。出産が濟むまで徳山砲臺も沈默致します。」

黒姫「ホ、、、、」

常助「此樹の根に女房が居ります。何卒宜しうお願ひ致します」

黒姫「ほんに〳〵綺麗な女房さんだな。これお常さんとやら、妾は三五數の黒姫と云ふ宣傳使だ。これから神樣に願つて、安く身二つにして上げますから御安心下さいませ」

徳公「もし〳〵黒姫さん、そんな亂暴な事をしちやいけませんぞ。二つにして上げるなんて、そんな無茶な事がありますか。……殺す勿れ……と云ふ律法をお前さんは蹂躙する積りですか」

黒姫「ホ、、、、譯の分らん男だこと、二つにして上げると云ふのは、親切にとりあげて親と子と分けて上げると云ふ事だ。つまり子を生れさす事だよ」

徳公「やアそれで安心した。何卒早く二つなつと三つなつとしてやつて下さい」

黒姫「ヒョッとしたら五つになるかも知れませぬから、吃驚せぬ樣にして下さい。……これ〳〵お常さん、大分息苦しさうだ。今樂にして上げますから、チッとばかり辛抱して下さい」

お常「ハイ、御親切に有難う御座います。とんだ厄介をかけまして申譯が御座いません」

黒姫「そんな心配成されますな」

と云ひ乍らお常の前に端座し、天津祝詞を奏上し天の數歌を謠ひ上げ、一生懸命に祈願を籠らした。

お常は「ウン」とばかり苦悶の聲と共に「ホギャー」と一聲飛びだしたのは、クリ〳〵とした男の兒……

黒姫「ヤアお目出度い〳〵……これ〳〵常助さん、徳さん、久さん、早く用意をなされお水の……私はまだ手がぬけませぬから……さアお常さん、も一氣張りだ」

と云ひ乍ら、又もや天の數歌を謠ひ上げる、「ホギャー」と一聲飛んで出た赤坊は女であつた。「ウン」と一聲又もや男の赤坊が飛びだした。

黒姫「さアも一氣張りだ」

と云ひ乍らお常の腰をグッと抱へて、「ウーン」と息を掛けた。「ホギャー」と云つて飛びだしたのは、女の赤坊であつた。

黒姫「さあ常助さん、お常さん、御安心成さいませや。腹帶を締めて上げませう。産前よりも産後が大切ですから後を氣をつけなさい」

お常「はい有難う御座います。お蔭で安産さして頂きました。此御恩は決して忘れませぬ」

徳公「何だ、家の鱗のお磯が双兒を生みやがつて、珍らしいと云つて村中の評判だつたが、此奴あ又豪氣だ。赤坊の夫婦が飛びだしたじやないか……なあ久公、なんでもこりや前の世で如何しても……お前と添はれねば、手に手を執つて死出三途、蓮の臺で一蓮托生、南無妙法蓮佗佛……と洒落て淵川へ身を投げた心中者の生れ變りだ

らうよ。何とまあ仲のいゝ者だな。死ぬ時も一緒に死に、生れる時も一緒に生れて來るのだから、ホントに巧妙な奴もあつたものだアハ、、、……俺も嬶アの死ぬ時や一緒に死んでやつて、又此赤坊の樣に、同じ母親の腹に生れて來てやらう。こりやうまい事を考へた。オホ、、、」

黑姫「これ〳〵入釜しい。下らぬ事を云ふじやありませぬよ。後の身体に障つたら如何しますか」

德公「それだと云つて、犬か猫か狐か狸の樣に、人間さんが一遍に四つも赤坊を生むのだもの、これが默つて居られるものか。生れてから初めて見たのだから、珍しくつて面白くつて仕方がありませぬわ。

四つ足の身魂か何か知らねども
一度に四つの子を生みにけり

常助とお常さんとの其仲に
狐の樣な子は生れけり

お常さん腹帶シツカリ締めなされ
後の肥立ちが肝腎だから

肝腎の常助さんはウロ〳〵と
呆氣面して何をウロ付く

常さんよ子は三界の首枷じや
うか〳〵せずに能く働けよ

今までは二人暮しの常さんも

これからチット荷が重うなる」

黒姫「これ〳〵徳さん、又八釜しい、チッと默つて居て下さい」

徳公「…黒姫が何程默れと云ふたとて
こんな事見て默つて居られよか
千早振る神代もきかぬ四人の
子が一時に生れ出るとは
狐ならば知らず人間の身体より
四つ足ドッコイ四つ身飛び出る
あゝ惟神、如何なる神の惡戯か
古今獨歩の今日の誕生
珍無類例しもあらぬお常さん
一度に四人フウ〳〵（夫婦）と生む」

黒姫「さあ、常助さん、お常さん、もう大丈夫です。御安心なさいませ」

お常「どんでも無い御世話になりました。決して此御恩は忘れません」

黒姫「隨分身体を大切に成さいませ。冷たい水を飲んだり無理をせぬ樣に、七十五日の間は御保養あらん事を、こん〳〵と懇望して置きます」

常助、お常「はい有難う御座います。左樣なればこれでお別れ致します」

と云ふより早く、常助、お常は眞白ケの大狐となり、眞白の尾を垂れて四匹の子供を連れ、ノソリ〳〵と森林深く姿を隱して了つた。

徳公「アハ、、、、、何だ。初めからチッと怪しいと思つて居たが、狐の産婆さんを

黒姫さんが成さつたのだな。何と偉い者だ。一遍に四人も子を産むのが變だと思つて居つた。如何やらまだ狐に騙されて居る樣な氣がするぞ……おい久公、俺の頰を抓つて見て呉れ。黒姫さん迄がソロ〳〵狐の親分の樣に見え出して來た」

黒姫「ホ、、、、、神樣のお道には別け隔てはありません。人民は申すに及ばず、鳥獸虫族に至る迄助けて行くのが三五教の御教だからなア」

德公「黒姫さんお前さんも呆れたでせう。初めは矢張り人間だと思ふて居たのでせう」

黒姫「そんな事の分らぬ妾ですかい。初めから常助だとか、お常だとか云つて居つたじやありませぬか。あゝして人間に化て居つたけれども、太い尻尾が股の間から一寸見えて居たのだ。お前はそれが氣がつかなかつたのだな」

德公「初めから狐だと思つたら、アタヽ嫌らしい、誰が相手になるものか。力一杯ブン殴つてやるのだつた。なあ久公、さつぱりコンと譯が分らぬ樣になつて來たじやないか」

久公「いや、もう餘りの事で何とも云ふ事が出來ないわ」

黒姫「さアも一息だ。そろ〳〵參りませうか」

德公「はい、參りませう。もう此先に出産して居つても、狐の取上げ丈けは斷つて下さい」

黒姫「狐ばかりか、虎でも狼でも獅子でも、熊でも大蛇でも鬼でも構はぬ、頼まれたら産婆さんをしてやりますよ。それが神樣の道に仕ふるものゝ盡すべき道だからなア」

德公「何と、恐ろしい宣傳使だなア。サア行かう」

と先に立ち、荒井峠を西へ〳〵と降り行く。

（大正一一、九、一七、舊七、二六、北村隆光樂）

瑞　月

お宮を碎き墓破ぶり　僕に思はぬ苦勞させ
妻子は涙の雨に濡れ　教の御子は世間から
しいたげられたも君故だ　骨に徹する怨恨も
好意を以て迎へた僕に　誠意が無いとは何を言ふ
眞に君こそ分らない　少しの常識あるならば
兎てもこちらへ來られまい　そこが君の君たる處だろ
何程招いて呉れたとて　君の誠意を認めぬ限り
僕は信用出來兼ぬる

第二〇章　疑心暗狐（九八四）

徳公『三五教の宣傳使
荒井ケ岳を下り行く
こけつまろびつ兩人が
五合目あたりに來て見れば
人待顔に湧いてゐる
一口喉をうるほせば
汗の曲津はどこへやら
寂滅爲樂となりよつた

黒姫さんに從ひて
ウントコドッコイ〳〵ショ
邊りに心を配りつゝ
天の與へか岩清水
コリヤ堪らんと飛付いて
今迄暴威を揮ひたる
縮み上がつてドッコイショ
黒姫さんが句を作る

德公久公もドッコイショ
天下の名句をひねりだす
盡きざる姿はドッコイショ
甦りたる心地して
常助さんと云ふ男
黑姫さんに手を仕へ
又々坂がキッウなつた
お常の產氣がつきました
人も通らぬ路ばたで
御苦勞乍らドッコイショ

黑姫さんの驥尾に附し
諄々としてウントコショ
泉の如く面白く
息を休むる折柄に
慌しくもやつて來て
途中に女房がドッコイショ
背中を用心するがよい
此山中のウントコショ
どうにも斯うにも仕樣がない
取上げ婆さんになつてくれと

誠しやかに賴む故
いと親切に承諾し
ガサ〳〵進んで行く內に
一人の女が坐つてる
魔性の女にドッコイショ
擧十字にあやなして
力をきわめて腰抱き
キャッと飛び出す狐の子
出るかと思へば又一つ
又もや一つの狐の兒

ウンと呑み込み黑姫が
夏草茂る木下かげ
大木の蔭にウントコショ
黑姫さんは親切に
知るや知らずや忽ちに
ウントコドッコイウントコセイ
介抱すれば忽ちに
又もや女の子狐が
男狐が飛んで出た
能く〳〵見れば牝だつた

狐が生んだ二夫婦　親を合して三夫婦が
太い尻尾をブリ〳〵と　右や左にふり乍ら
黒姫さんに禮言うて　後振返り〳〵
叢分けてガサ〳〵と　姿かくした面白さ
尻尾許りかウントコショ　頭の毛まで皆白い
雪を欺く白狐さん　必ず御恩は忘れぬと
黒姫さんに言ひよつた　思へば〳〵ドッコイショ
狐の取上げする婆さん　虎狼や獅子熊や
大蛇の端に至る迄　助けてやるのが神の道
取上げますといひなすつた　ウントコドッコイ〳〵ショ

ホンに感心々々と　股をひろげて坂路を
下り乍らも何となく　黒姫さんのスタイルが
厭らしうなつてドッコイショ　氣分が惡くなりました
ウントコドッコイ〳〵ショ　どうせ碌なドッコイショ
婆さんぢやないと思ふてゐた　自轉倒島に年古く
往居を致して世を紊す　金毛九尾ぢやあるまいか
ウントコドッコイ龍宮の　乙姫さんの生宮と
話の端に聞いた故　此奴あウッカリ出來ないぞ
グヅ〳〵してゐちや頭から　ヤットコショー〳〵
それ〳〵そこに石がある　呑まれて了うと思ふた故

猫を被つてハイ〳〵と　ウントコドツコイ痩馬を
牽いて坂路登るよに　いとおとなしう從うて
茲まで從いてドツコイショ　やつて來たのが德さんだ
狐の嫁入ドツコイショ　すると云ふ事聞いたれど
其時や日和で雨が降る　天道さんがガン〳〵と
お照らし遊ばす眞晝中　魔性の狐が現はれて
あつがましくも人の前　尻尾をかくしてやつて來て
取上げてくれとは何の事　ウントコドツコイ此方が
人間樣であつたなら　四つ足體の畜生が
如何して恐れて近よらう　黑姫さんはドツコイショ

てつきり狐の親玉か　銀毛八尾のドツコイショ
古い狐の御化身か　眉毛に唾つけ眺むれど
根つから尻尾が見ねよらぬ　餘程刼へた奴だらう
ウントコドツコイヤツトコショ　コレ〳〵モウシ黑さんに
私はお前をウントコショ　ここ迄送つた返禮に
ウントコドツコイ〳〵ショ　足元危なうなつて來た
私は決してだまさぬと　一言誓うて下さんせ
狐を馬に乘せたよな　怪しい氣分になりました
オイ〳〵久公如何思ふ　ホンに怪体なウントコショ
譯の分らぬ事ぢやなア　荒井峠と思うてたら

人跡絶えし山奥の　虎狼の吼にたける
深山の奥かも知れないぞ　どしてもこしても腑におちぬ
コン〳〵さんの御出産　取上げ婆さんの黒さんに
常助お常と化けた奴　親分子分の關係で
あんな事をばドッコイショ　平氣な顔で白晝に
やつたであらうか恐ろしい　荒井の峠はいつとても
不思議な所とは聞きつれど　前代未聞の此怪事
此謎とくのは六つかしい　あゝ　惟神々々
御靈幸はひまし〳〵て　國魂神の純世姫
表に現はれまし〳〵て　黒姫さんは善神か
但は惡魔かハッキリと　どうぞ立別け下さんせ
此世を造りし神直日　心も廣き大直日
只何事も神樣に　任して御願致します
誠の神か曲神か　但は狐の親分か
合點のいかない黒姫を　正体現はし兩人が
心を安めて下さんせ　縱からみてもドッコイショ
横から見ても黒姫は　矢張人のスタイルだ
之が狐であつたなら　餘程上手に化けた者
ホンに分らぬ今日の旅　あゝ　惟神々々
久公シッカリして居れよ　それ〳〵そこに石がある

黒姫さんを先に立て　お前と俺と兩人は
あとから從いてドッコイショ　尻のあたりを査べつゝ
審神し乍ら下らうか　モウシ〳〵黒姫さん
どうぞお先へドッコイショ　あなたはお出で下さんせ
後に目玉のない私　どんな惡戯されよかと
心にかゝつてなりませぬ　疑心暗鬼か知らね共
お前のやうな化者と　一緒に行くのは眞平だ
あゝ惟神々々　御靈幸はひましませよ」

と謠ひ乍ら、黒姫一行は一足〳〵力を入れて降り行く。黒姫は歌ひ出した。

黒姫「國治立大神や　豐國姫大御神
神素盞嗚大神が　開き玉ひし三五の
教を傳ふる宣傳使　尊き神の生宮と
神の依さしの黒姫を　假令狐や狸でも
誠を知らぬ困り者　何ぢやかんぢやと罵つて
殘らず神の造らしゝ　尊き身魂である樣に
曇り切つたる世の中の　人間よりも畜生の
狐や狸の魂が　神の御目より眺むれば
遙に優つて居る程に　天地の道理ち白雲の
包む山路をふみこゑて　迷ひに迷ふ二人連れ
少しく心をおちつけて　此黒姫が言靈を

味はひ聞くがよからうぞ
一度に開く五六七の世
四方の山々花開き
清くさやけくすみ渡る
そうなる上は人間は
這ふ虫迄も悉く
與へて尊き天國の
海の内外に使はして
開かせ玉ふ三五の
狐狸と言はれても
三千世界の梅の花
松の神代も近づいて
小鳥は唄ひ海河は
尊き御世の開け口
いふち更なり鳥獣
神の惠の御露を
妻をうつす宣傳使
神の御旨を限もなく
神の仕組を知らないか
此黒姫は構はない

さはさり乍ら徳公さん
此神國は言靈の
畏れ多くも三五の
銀毛八尾の狐とは
お前の心にかかりたる
外して私の顔を見よ
普通の人ではない程に
鎮まりゐます乙姫の
あゝ惟神々々
徳、久二人の魂に
チッとは慎みなされませ
幸はひ助け生くる國
神の司を見違ひて
誤解するにも程がある
其黒幕を逸早く
何ほど黒い黒姫も
龍宮海の底深く
神命の生宮ぞ
御靈幸はひまし〳〵て
光りを與へ村肝の

心の暗を晴らしませ　三五教の黒姫が
國魂神の御前に　慎み敬ひ願ぎまつる
あゝ　惟神々々　御蔭幸はひましませよ」

と謠ひつゝ、ズン〳〵と坂路を降り行く。

（大正一一、九、一七、舊七、二六、松村眞澄錄）

第二一章　暗闘（九八五）

房公、芳公兩人は　建日の舘を立ち出でゝ
黒姫さんの後を追ひ　峻しき山坂トン〳〵と
捻鉢卷に尻からげ　藥鑵頭に湯氣を立て
後追かけて來て見れば　火の國峠の登り口
黒姫さんのお姿は　雲か霞か魔か神か
ドロンと消えて影もなし　ウントコドッコイこのやうな
はげしい坂をばウントコショ　黒姫さんの年寄が
どうして登つて往たろか　影も形も見えないと

二人は足を早めつゝ、

エンヤラヤーエンヤラヤ　老樹茂れる坂道を

足をヅル〳〵辷らせつ　ハー〳〵スウ〳〵云ひながら

やうな峻しき坂道を　板を立てたるドッコイショ

當の主人の黒姫は　兎の如くに這ふて往く

向ふへ渡つて森中に　道踏み迷ひ丸木橋

助けていることは知らずして　お愛其他の男をば

進み行くこそ憐れなり。

二人は日のヅブリ暮れた頃、漸くにして火の國峠の絶頂に辿りついた。そこには枝ぶりの面白い山桃の木が七八本、不遠慮に空を鎖して立つて居る。

房公『オイ芳、これだけ俺達は一生懸命に走つて來たけれど、黒姫さんに追つかないのた大方道が違つたのぢやあるまいかなア』

芳公『さうだなア、どうも怪しいものだ。何でも坂の上り口に右へ行く細い道があつたが、大方其方へでも迷ひ込んでも行かれたのぢやあるまいか。どう考へてもそれより外に道が無いぢやないか。まア兎も角も今晩は此木の下でお宿を借る事にせう。又人でも通つたら尋ねやうとまゝだから、夜の途を急いだ處で仕方がない。俺も大分に疲れて來たからなア』

房公『そんなら仕方がない、一泊して行かうかい』

と云ひながら、兩人は蓑をしきゝゝと横になつて仕舞つた。

そこへ西の方から、コチン〳〵と爪の先で道の小石を叩きながら、登つて來た一人の白髪の老人がある。老人は二人の休む傍に立ち寄り、杖の先にて二人の額あたりを

交るゞ〳〵グイ〳〵と突いて見た。二人は「アイタヽ」と言ひながら、ガワと跳ね起き、薄暗がりにすかし見て

「ダダ誰だい、俺の頭を杖でこづきやがつた男は、ふざけた事をしやがると承知しないぞ」

老人「アハヽヽヽ。餘り暗いものだから……何だか厭がするので近寄つて見れば、暗がりに光つたものが一つゝ其横に黒いものが又一つ倒れて居るので、これや又狸の睾丸ではあるまいかと思ふて、杖の先で一寸いぢつて見たのだよ。何を云ふても暗がりと云ひ、老人で目が疎いのだから、頭の一つやそこら割れたつて辛棒して下さい。何程腹が立つても年寄は大切にせねばならぬ規則だから……」

房公「どこの老人か知らぬが、知らんとやつた事は仕方がないが、唯一言の斷りも言はず、反對に老人尊敬論を捲し立てやがつて太い奴だ。大方お前は化州だらう。サア正体を現はせ！」

老人「オホヽヽヽ、どうせ化衆に違ひないが、俺でさへも肝を潰すやうな闇の中に、よう光る藥鐘頭があつたものだから、ヒネた狸の睾丸ではあるまいかと、一寸泥のついた杖の先でいぢつて見たのだから、了見さつしやい。知らぬ神に祟りなしと云ふから、さう老人に毒つくものぢやありませぬぞや」

芳公「もしお爺さん、知らずにした事は仕方がありませぬ。こちらも兩人の者が、この木の下に逗留して居ると云ふ廣告を出して置かないものだから、間違へられても何とも云ふ事は出來ませぬ。併しながら黒姫と云ふ五十許りのお婆アさんに、お出會ひでは御座いませなんだか？」

老人『何だか黒いものにチョコ〳〵出遇ふたが、向ふが默つて通りよつたものだから、どれが黒姫だか黒狐だか、熊だか烏だか區別が付きませぬわい』

芳公『お爺さん、この暗いのにお前さんは一たいどこへ行く積りだね』

老人『俺は仕方がない極道息子が二人あつて、此坂を今登つて來る筈だから迎へに來たのだよ』

芳公『へエ、その又二人の息子とはどんな人ですか？』

老人『さうだなア、一人は暗の晩でも藥鑵のやうに頭が光つて、一寸腰が曲り脊の低い男だ。そして一人は少し圖體の大きい三十男だが、そいつは又癖が惡くて弱い相撲取り、負て〳〵負通し、人から鍋蓋なんと迄名を取つた困つた伜だよ。黒姫と云ふ宣傳使のお供に來ながら、アタいやしい振舞酒に醉ふて肝腎の主人を見失ひ、こんな所へやつて來て、安閑と寢て居ると云ふ、話にも杭にもかゝらぬ……極道息子だよ！』

と雷のやうな聲で呶鳴り立てた。二人はこの聲に驚いて飛び上り、暗の中を三四間無暗矢鱈に駈まはり、房公と芳公は急速力をもつて正面衝突をなし、二つの眼からピカ〳〵と火を出した。

『アイタ、、、』

と目を押へて互に蹲んで仕舞ふ。

老人『アハ、、、、房野丸と、芳野丸とが衝突を致しましたなア。大した破損は無かつたかなア。機關庫が爆發したと見にてずゐぶん偉い光りだつた、ワハ、、、』

芳公『コレヤ化爺、人の難儀を見て面白さうに笑ふと云ふやうな、不道徳な奴がどこに

あるか。恰で鬼のやうな糞爺だなア」

老人「お前の云ふ通り、俺は見る影もない糞爺だ。目糞に齒糞、耳糞に鼻糞、お前のように尻糞はつけて居ないが、隨分汚い糞爺だよ」

芳公「オイ糞爺、俺が尻糞をつけて居るなんて失敬な事を云ふない。この暗がりで目が見ゐ惡いと吐した癖に、尻糞迄どうして分るのだ。糞があきれて雪隱が踊るわい」

老人「何とまア糞やかましい男だなア。俺は火の國の聖と云つて、どんな事でもしりてゝしりぬいて居る牛の尻だよ。お前の尻の毛が何本あると云ふ所まで知つて居るのだから……」

芳公「これや化爺、そんなら俺の尻の毛が何本あるか當てゝ見い！」

老人「オホ、、、、かう見た處が唯の一本も無いぢやないか。お瀧の素片多女に惚けやがつて、尻の毛を一本もない迄抜かれたと見ゐる哩。まるきり午蒡の切口か、炭の切口のやうな黒い尻だのう」

芳公「何を吐してけつかりやがるのだ。もうよい加減に素つこまぬか、尻の穴奴が！」

老人「すつ込めと云つたつて、十年許り苦しんで居る脱肛だから、容易に素つ込みはせないぞや。これと云ふのも房公芳公と云ふ極道息子があるために、それが苦になつてこんな病氣が起つたのだよ。親不孝な息子もあつたものだ。こんな奴は今に天罰が當つて、火の國峠の大蛇に呑まれて仕舞ふと、婆婆ふさぎの厄介者がなくなつてよいのだがなア。神が表に現はれて、善と惡とを立てかへる世の中だから、どうせ二人の極道息子の壽命も長い事はあるまい。あゝ可愛さうなやうな氣味のよい事だ哩。オホ、、、」

と遠慮會釋もなく、暗がりにボッと姿を現はして嘲笑ふ。厚公は最前の正面衝突で鼻血を出し、痛さに物をもよう云はず、地にかぶり付いて泣いて居る。

爺は皺がれた聲で謠ひ出した。

老人「黒姫婆さんの供をして
　暗い峠を登り來る
　心の舵を取り外し
　藥罐頭が鼻打つて
　流して踞むいぢらしさ
　遥々つらつて來た友の
　高山峠を一散に
　心も暗い兩人が
　後前見ずの闇雲で
　顏と顏とが衝突し
　赤い鼻血をタラ〳〵と
　黒姫司にそゝられて
　難儀を見捨てゝスタ〳〵と
　登つて出て來る不人情
　人の皮着た代物の
　貴樣二人の心には
　黒い顏した鬼が居る
　生れ赤兒になりかはり
　尊き神の御使と
　黒姫如きの供をして
　前代未聞の馬鹿者だ
　お前の御魂を磨き上げ
　造り直して神界の
　茲に姿を現はして
　平氣で出來る業ぢやない
　黒姫よりもまだわるい
　其鬼共を追ひ出して
　尻の掃除をよつくして
　早くなれ〳〵いつ迄も
　男が立つと思てるか
　我は國治立神
　誠の神の生宮と
　御用をさせてやり度いと
　お前等二人の眼を醒まし

無限の力をそれ〴〵に
神の御息に生れたる
誠一つを立て通し
花の都へ立ち向ひ
戀の闇をば晴らせかし
夫のために魂を
其愚さは限りなし
後に從ひ遙々と
猶更馬鹿代物だ
云ふたは眞赤な詐りで
配り與ふる神ながら
汝は是から謹みて
一日も早く火の國の
黒姫司が迷ひ居る
神の大道を踏みながら
扳かれて來たる黒姫の
迷ひきつたる黒姫の
こゝ迄來たる二人連れ
國治立大神と
我は月照彦神
早く御魂を立て直し
嚴の御靈や瑞御靈
教の柱となれよかし
魂を守つて何時迄も
あゝ惟神々々
と謡ひ終るや、怪しき老人の姿は煙となつて消え失せ、後には尾上を渡る松風の音、
ザワ〴〵〴〵と聞え來る。
芳公「オイ房公さん、ゆうだ鼻柱は些しよくなつたかなア。あんまり常から鼻が高いものだから、今現はれた神様が鼻を捻ぢ折つて改心させてやらうとなさつたのだよ。いつとても貴様は高慢が強ふて鼻を高ふするから、こんな目に遇ふたのだ。途中の清明無垢の身となつて
開きたまひし三五の
神は汝の身を守り
太しき功を立てさせん
御靈幸倍ましませよ」

鼻高と云ふのはお前の事だよ」

房公「何でもいゝわ。俺はもう恐ろしくつて何どころぢやない。大方あれは、此山の大天狗に間違ひなからうぞ。何でも彼でも俺達の事を皆知つてござつたぢやないか」

芳公「天狗の話はもう止めて吳れ。天狗と聞くと何だか首筋がゾク〳〵して來るからなア。あゝ惟神靈幸倍坐世」

房公「こんな處へ長居は恐れだ。サア行かう。黑姫さんが火の國で待つて居られるだらうからなア」

芳公「行かうと云つた處で是だけ酷い坂道、其上闇と來て居るのだから、どうする事も出來はせないぞ。まア此處で天津祝詞を奏上し、神樣を祈つて夜を明かす事とせう」

（大正一一、九、一七、舊七、二六、加藤明子錄）

第二二章　當違（九八六）

火の國都の高山彦が門前に現はれた二人の男、こは云はずと知れた房公、芳公の兩人であつた。

房公「もし〳〵門番樣、何卒通して下さいませ」

門番の輕公は門内より

輕公「村肝の心の岩戸の締りたる
　曲津の通る門口でなし。
心より神の大道をあきらめよ
　天ケ下には妨げもなし。

此門は心正しき人々の
大手擴げて通る門口。
我胸の門を開けば忽ちに
これの鐵門は自ら開く」

房公は外より

房公「洒落た事言ふ門番が守り居る
困つたもんに突き當りけり。

芳公「よし我を卑しきものと見るとても
輕く開けよ神の鐵門を。
よしも無き事に暇をば潰すより
心の門を開き通せよ。
我々そは自轉倒島の神の子よ
神の通はぬ門口は無し。
皇神の任しのまゝに渡り來る
神の御子をば忽疎かにすな」

輕公は門内より

輕公「輕々しくどうして鐵門が開かれよか
曲の猛びの强き世なれば。
曲神が誠の神となりすまし
人を誑かる闇の世なれば」

門の外より房公の聲

房公「躊躇ふな我は頭てらす大御神
　　榮ゑの門を開く神ぞや」

輕公門内より

輕公「いざさらば頭てらします大御神
　　進ませ給へこれの鐵門を」

と歌ひ乍ら、門をガタリと外し門を左右にパッと開いた。房公、芳公は輕公に輕く目禮し乍ら、足も輕げに奥へ〳〵と進み行く。

玄關の受付には、五十恰好、顔の少し細長い男が控へて居る。

房公「私は三五教の黒姫のお供をして此處迄參つたもので御座いますが、黒姫さんは此

方へお世話になつて居られますかな」

受付「三五教の黒姫様と云へば、隨分黄金の玉で名の知れた宣傳使だが、未だ此方へはお見ゑになつて居りません」

房公「當舘の御主人は、矢張り高山彦と申すお方で御座いますか？」

受付「左様で御座います。御主人は高山彦、奥様は愛子姫と申す立派な神司で御座います」

房公「高山彦様は御在宅ですか。一寸お伺ひ致し度う御座いますが……」

と意味ありげに云ふ。

受付「私は受付の玉公と云ふ男だが、何でも高山彦の御主人は、今朝早々何處かへ修行にお越しになつたと聞いて居ります。乍然受付の我々は詳しい事は存じません」

房公『何卒すみませぬが、高山彦様がお留守ならば、一寸奥様に會はして下さる譯にはいけますまいか。いづれ後から高山彦様の前の奥さんが見にますから、それ以前に一寸お目に當つて御伺ひして置けば、前以て圓滿解決の曙光を認めるものですから何とか一つ取りもつて下さい』

玉公『滅相もない。主人の御不在中に、奥様が男の方に御對面は遊ばゝません。殘念ながら何卒諦めて下さいませ。さうして御主人様の前の奥様とは、何と云ふお方で御座いますか？』

房公は少しく胸を張り、切り口上にて

房公『勿体なくも三五教の大宣傳使黒姫様で御座る。我々は其黒姫様の肱の臣で御座るから、鄭重にお待遇し成さるが宜からう。如何に愛子姫様だとて此事をお聞きになれば、お合にならぬと云ふ譯には參りますまい』

と肩肱怒らし禿頭に湯氣を立て、章魚が裃着た様な恰好で肩を四角に固くなつて居る。

玉公『ハヽヽヽヽ、そりや大變な大間違ひじやありませぬか。御主人の高山彦様はまたお年がお若い屈强盛りです。さうして愛子姫様をお迎へ遊ばしたのが、女をお持ちになつた最初だと云ふ事ですから、そんな年を寄つたお婆アさんを女房に持つて居られる筈はありません。何かのお間違でせう』

房公『アハヽヽヽ、何とまあ上から下まで能う腹を合したものだなあ。萬里の派濤を越にて、遙々と夫の後を慕ひ尋ねて御座つた貞淑な黒姫さんを袖にして、若い女を女房に持ち、面白可笑しく此世を渡らうとは狡い量見だ。高山彦さんも餘程墮落をした

ものだなア。六十の尻を作り乍ら、チット心得たら宜ささうな百だ。若い奥さんを貰つて若返り、屈強盛りの壯年の樣になつたのかなア。人間と云ふものは心の持ち樣が肝腎だ。然し黒姫さんは、何處に迷ふて御座るだらうか。もしも斯んな處へ御入來になつたら、それこそ大變だがなア」

此時一間を隔てゝ聞ゑ來る一絃琴の聲、歌の主人は此家の女主人愛子姫であつた。

愛子姫『千早振る遠き神世の昔より　國治立大神は
天地四方の神人を　いと平けく安らけく
常世の春に救はんと　心を千々に配りつゝ
夜と晝との分ちなく　遠き近きの隔てなく
高き卑しき押なべて　惠の露をたれ給ひ
三五教の御教を　島の八十島八十の國
諸越山の奥までも　開かせ給ふ有難さ
我春の君は天照　皇大神の御任かせる
五百津美須滿琉々々々々の　玉の威德に現れまして
活津彦根の神となり　神素盞嗚大神の
御子と仕へて天ケ下　四方の國々隈もなく
嚴の教を宣べ給ふ　高國別の宣傳使
天教山より降ります　八島の別や敷妙の
姫の命の後襲ひ　高山彦と名を變へて
此世を忍び給ひつゝ　五六七の御代を待ち給ふ

神の御裔ぞ尊けれ
神素盞嗚大神の
愛子の姫と名乘りつゝ
メソポタミヤの天恩郷に
建てゝ教を開くたる
御許に永く隱れつゝ
太玉彦の宣傳使
御稜威を現はし給ひしゆ
雲を霞と逃げ去りぬ
天恩郷を立ち出でゝ

妾も同じ瑞御靈
生ませ給へる珍の御子
父大神の御言もて
バラモン教の館をば
鬼雲彦の曲神が
心用ふる折柄に
現はれ來りし太玉の
鬼雲彦は驚いて
妾姉妹八人は
おのも〳〵に身を窶し

三五教の御教を
魔神の爲めに妹は
遠く流され千萬の
道をば傳へ進み行く
今や何處の野に山に
あゝ惟神々々
一日も早く姉妹が
樂しむ時を松の世の
偏に願ひ奉る
大御詔に蒙りて

四方に傳ふる折柄に
艱まされつゝ波の上
艱みを凌ぎ大神の
あゝ健氣なる姉妹よ
いとしき妹は遙道ふか
神の御靈の幸はひて
無事なる顏を寄り合せ
五六七の神の御前に
我脊の君は皇神の
柱の瀧に出でましぬ

あゝ　惟神々々　　皇大神の御恵みに
我脊の君が百の日の　　禊身をやすく濟ませかし
愛子の姫が謹みて　　清き玉琴かき鳴らし
すが〳〵しくも祈ぎ奉る　　あゝ　惟神々々
御靈幸はひましませよ」

と謠ふ聲、二人の耳に透き通る樣に聞ゑて來た。

芳公『もし〳〵玉公さん、今のお聲は愛子姫樣じや御座いませぬか。あのお歌の樣子では、我々の御先生黒姫樣の御尋ね遊ばす、高山彦さんでは無い樣な氣が致しました一体此方の御主人は何處から御入來になりましたか？』

玉公『此神館は二三年前まで、天敎山より降りましたる天使八島別命樣御夫婦がお守りになつて居りましたが、天敎山より日の出別神樣お越し遊ばし、木花姫命樣の御用が忙しいから、元の如く天敎山に歸つて呉れよとの御神勅で、日の出別の神樣と共に、此都をお立ち退き遊ばされ、其後へ神素盞嗚大神樣が、天照大御神樣の嚴の御靈と生れませる活津彦根命樣を、お連れ遊ばして御入來になり、素盞嗚尊樣の惣領息女の愛子姫樣を妻となし、お歸り遊ばしたので御座います。他の宣傳使とは事變り、隨分御神德の高い神司で、畢竟生神樣で御座います』

房公『ハテナア、何が何だかサツパリ譯が分らなくなつて來ました。オイ芳公、コリヤ一つ考へねばなるまいぞ』

芳公『まるで火の國峠の天狗に魅まゝれた樣な話だなア。こりや斯うしては居られない黒姫さんの所在探した上で、何とか思案をせにやなるまい……玉公さん、有難う

御座いました。又お邪魔を致します。奥様にも宜しく……」

と云ひ捨て慌しく蓑笠をつけ、金剛杖をつき乍ら表門指して出で、行く。

（大正一一、九、一七、舊七、二六、北村屋光錄）

瑞　月

二度も三度も壓制で
○○○○や○○○○
世界の誤解や遍倚をば
勝手な理窟もあるものだ
如何に雅量のある僕も
主張する樣な君とは合はぬ
注意しておく下等格
お宮を壞はし奥津城を
こはしてやつた俺の心
無益なものを取拂ひ
ためんが爲の神策と
詭辯を弄するも程がある
國体までも無視せんと
少しは直日に省みよ

第二三章　清交（九八七）

火の國館の門前近く、宣傳歌を謠ひ乍ら入り來る一人の宣傳使がいつた。之は玉治別命である。

玉治別『神が表に現はれて
戀に迷うた黒姫が
朝な夕なにまめやかに
高山彦の神司
心一つに思ひつめ
三五教の宣傳を
善神邪神を立分ける
自轉倒島の聖場に
仕へつとむるハズバント
筑紫の島に渡りしと
百の惱みに堪へ乍ら
兼ねつゝ來る浪の上

つくしケ岳をふみ越ゑて
人跡稀なる谷の路
後に眺めて荒井岳
火の國一の急坂を
あゝ　惟神　々々
現はれ來ることあらば
吾脊の君と只管に
誠の夫に非ずして
天照します大神の
五百津みすまる〳〵の
岩の根木の根よけ乍ら
向日峠や屋方村
二人の御供ゞ伴ひて
登りつ下りつ進み來る
黒姫司が今こゝに
さぞや驚くことだらう
思ひし高山彦神は
思ひもよらぬ人の夫
御手の手卷にまか〻たる
玉の精氣にあれましゝ

活津彦根の神司
さすがに氣丈の黒姫も
思へば〳〵いぢらしい
黒姫さんの迷ひをば
神の集まる珍の島
高山彦と諸共に
誠の道に仕へまし
清くも仕へさせ玉へ
神素盞嗚　大神の
ウブスナ山の山頂に
高國別と聞くならば
さぞや驚き玉ふらむ
一日も早く片時も
晴らし助けて自轉倒の
綾の高天につれ歸り
睦び親しみ皇神の
廡廻の寶珠の神業に
あゝ　惟神　々々
御言を畏みフサの國
大宮桂　太しりて

そゝり立ちたるイソ館　聖地を後にはるゞゝと
エデンの河を舟に乘り　フサの海をば横斷し
つくしの島の熊襲國　建日の港に上陸し
黑姫さんを助けんと　こゝ迄進み來りけり
あゝ惟神々々　御靈幸はひましませよ」

と歌ひ乍ら、門前近く現はれた。

門番の輕公は此宣傳歌に勇み立ち、威儀を正して門を開き、

輕公「玉治の別命の出でましと
知るより心勇みける哉。
高山の彦命の後逐うて
黑姫司出でますと聞く。
黑姫の御供の人が今二人
力なくゝ歸りましける。
高國の別命の神司
桂の瀧に出でましにけり。
玉治の別命よ速かに
鐵門をくゞり奥に入りませ。
惟神神の惠の深くして
今日は尊き神に合ふ哉。
有難や玉治別の出でましに

御空も淸く晴れ渡りけり。」
大空の星にも擬ふ玉治の
別の身魂の美はしき哉」

と口を極めて讃美し、歡迎してゐる。

玉治別『美はしき火の國都の鐵門守る
輕の君こそ雄々しき男の子。」
我こそは玉治別の神司
館の君に會はまくぞ思ふ。」
高國の別命は雄々しくも
桂の瀧に出でますと聞く。」

さり乍ら愛子の姫はおはすらん
我は代りて言問ひやせむ」

門番の輕公は又歌ふ。

輕公『神館主の君は居まさねど
愛子の姫に會はせまつらむ。
玉治の別命よ吾れは今
君の御爲に導きをせむ』

玉治『今こそは人情知られけり
鐵門を守る人の言葉に。
黑姫はやがては茲に來るらむ

安く通せよ鐵門守る人」

輕公『黑姫を易く通すぢやなけれ共

君の詞に詮術もなし。

君ならで誰に開かん此鐵門

主の君の許しなくして」

玉治別又歌ふ、

玉治『いざさらば珍の館へ進みなん

心も足も輕公の惠に』

かく應答し乍ら、いつの間にか玄關口についた。輕公は受附の玉公に向ひ、歌をよんだ。

輕公『玉公よ、今より表の鐵門守れ

われは是より受附をせむ』

玉公『いざさらば表に立ちていかめしく

みことのまゝに鐵門守らむ』

といひ乍ら、ッつと立つて元の門番になつて了つた。

此輕公は、津輕命といふ館の主の股肱と頼む宣傳使であつた。津輕命は玉治別命に向ひ又謠ふ。

『いざ早く奥の一間に通りませ

主の君は汝を待ちつゝ』

玉治『神館、主の神はまさね共

いろとの君に物や申さむ」

といひ乍ら、津輕命に導かれ、奥の間さして進み入る。愛子の姫は玉治別の入來を聞き、あわただしく衣紋をつくろひ、髪をなで上げ、しづ〳〵として此方に向つて歩み來る。長き廊下に差かゝる折、玉治別にパッと出會つた。

愛子姫『世の人を導き救ふ愛子姫

汝を迎へむと茲に來にけり。

汝が命、これの館に來ますぞと

きくより日々に待ちあぐみける。

うるはしき玉治別の神司

高き其名は世に響きけり。

あゝ清き神の姿を目のあたり

拜むが如く〳〵ぎ見るかな」

玉治別は之に答へて、

『名も高き火の國都の神司

妻とあれます汝ぞ尊き。

蓋嗚の神の尊の愛娘

姫命を慕ひけるかな。

うるはしき其御心の現はれて

御姿さへも輝きにけり。

てりわたる天津御空の月の如

清き姿を今拜むかな」

と歌ひ乍ら、愛子姫、津輕命に前後を守られ、一間の内に悠々として進み入る。

奥の一間に三人は鼎座して、互に打とけ嬉しげに語り會ふ。

愛子「玉治別の宣傳使樣、ようマアはる〴〵と訪ねて來て下さいました。夫高國別は、折惡く今朝桂の瀧へ御禊の爲に、百日の心願をこめて參りました不在中で、誠に不都合なれ共、ゆる〳〵御休息の上、國々の御珍らしいお話を聞かせて下さいませ」

玉治「ハイ有難う御座います」

と云ひ乍ら、愛子姫が妹の所在を一々物語、且又其活動振を詳細に傳へた。愛子の姫はれも云はれぬ愉快なる面色にて、

愛子「玉治別さま、隨分あなたも御苦勞なさいましたなア。神樣の爲世人の爲、どうぞ御壯健にて御神務にお仕へ下さいますよう、祈ります」

玉治「ハイ有難う御座います。私も不運な身の上、父母にすてられ、ホンの獨身者で御座いますが、三五教に歸順いたしましてより、國依別さまの妹を女房に貰ひうけ、今は夫婦が力を協せて、神さまの御用を一心に致して居ります。イヤもう苦勞といつても、神さまと道伴れの苦勞で御座いますから、どこの國へ參りましても、眞に愉快でたまりません」

愛子「あゝ左樣で御座いますか。妾も何とかして妹の樣に世界各國を巡教いたしたく存じまするが、何を云つても、夫ある身の上、思ふようには參りません。身魂の因緣相應の御用より出來ないものと見ねますなア」

玉治「いかにも左樣で御座いませう。時に三五教の黑姫さまは、高山彦といふ御主人が

御座いますが、綾の聖地に於て、下らぬことから喧嘩をなされまして、高山彦さは、筑紫の島へ行くと云ひ切つた儘、どこかへお隠れになりました。そこで黒姫さまが、高山彦様はキッとつくし島に御座ることゝ思召され、はる〳〵と海山越にて此國へ來てゐられます。高國別さまの又の御名が高山彦さまと申すので、黒姫さまは我夫とのみ思ひつめ、やがて茲へお越しになるでせうから、どうぞお願で御座います。奥へ御通し下さいまして、一應話をきいて上げて下さいませ。玉治別が御願で御座います」

愛子「それは又妙な事でムいますなア。黒姫さまの御主人もヤッパリ高山彦さまでムいましたかなア。其高山彦さまの御所在はお分りになつて居りますか？」

玉治「高山彦様はアフリカへ御渡りかと思ひきや、依然として聖地に現はれ、神さまに朝夕お仕へをしてゐられます。私はそれを見るにつけ、黒姫さまの御心根が可哀相になり、素盞嗚大神さまのましますイソの館へ一旦參りまして、更めてこゝへ渡り、黒姫さまに巡り會つて、知らして上げたいと思ひ、宣傳をかね、お迎へ旁く參りましたので御座います」

愛子「それはマア御親切な事で御座います。黒姫さまがあなたの御心底を御聞きになられたら、さぞお喜びになることでせう」

玉治「ハイ有難う、私の伺ひでは、此お館にて餘り遠からぬ内、黒姫さまに御面會が出來るように存じます」

愛子「妾も左様に心得ます。どうぞ早くお越し下さると宜しいがなア」

かく話す折しも、門番の玉公はあわたゞしく入り來り、

玉公「三五教の黒姫といふ婆アさんが、五人の荒男を伴れて、表門へ現はれ、此門を開け……と言つて居りまする。如何致しませうかなア」

津輕「玉公御苦勞だが、早く表門をひらき、黒姫さま一行を、此處へ御案内申せ」

玉公不審な顏して、

玉公「へー、あんな惡い奴を澤山伴れた婆アでも、通して宜しいか。高山彦さまの女房だなんぞと言つてゐましたよ。モシもあんな婆アさんを引つぱり込まうものなら大變ですよ。第一愛子姫さまが御迷惑を遊ばすでせう」

津輕「構はないから、早くお迎へ申して來い」

「ハイ」と答へて門番は表をさして走り行く。

（大正一一、九、一七、舊七、二六、松村眞澄錄）

第二四章　歡喜の涙（九八八）

愛子姫は黒姫の訪問と聞き、稍危み乍ら、玄關口に津輕命と共に出て迎うた。玉治別は後に只一人腕を組み、何か思案にくれてゐる。黒姫は玄關口に立ち

黒姫「高山の彦命の後追うて
渡り來れるわれは黒姫
高山の彦命は如何にして
我れを出迎へ遊ばさざるや」

愛子「あらたふと、黒姫司はる〳〵と
出でます事の心嬉しき

いざ早く館の奥へ上りませ
汝來ますとて我は待ちけり
玉治の別命も出でまして
汝が命を待たせ玉ひぬ」

黒姫「いざさらばお構へなくば奥の間へ
進みて夫に言問ひやせむ
高山の彦命の情なさよ
我を見すてゝかゝる國まで
年老し身も顧みず若草の
妻持たすとは何の心ぞ

うらめしき汝が命の姿かな
我春の君の背子と思へば」

愛子「黒姫の神の司よ聞しめせ
我背の君は高國別の神
高山の彦命と名乗れ共
活津彦根の神にまします
ともかくも奥に入りませ三五の
神の司の黒姫の君」

黒姫「さようなら、これより奥へ駈込んで
否應いはさず調べてや見む

詐りの多き此世こ知らずして
さまよひ來りし心悲しき」

愛子「疑の雲明かに晴れぬらん
我背の君の繪像見ませば」

黒姫「さても〳〵合點の往かぬ汝が詞
荒井ケ岳の狐かこそ思ふ」

津輕「これはしたり、口が惡いも程がある
黒姫さんよ、何を證據に」

黒姫「自轉倒島を後にして　姿隱した高山の
彦命の我夫は　つくしの島に渡るとて

われを見すて、出で、行く　妾は後をしたひつゝ
遠き海路を打わたり　險しき山をふみこゆて
雨にさらされ荒風に　髮梳りトボ〳〵と
三人の供を從ひて　ここ迄進み來りけり
あゝ　惟神　々々　誠の神のましまさば
愛子の姫がすゆなくも　我脊の命を奥深く
包みかくして白ばくれ　たばかる醜の枉業を
あらはせ玉へ　惟神　皇大神の御前に
三五教の神司　黒姫謹み願ぎまつる」

愛子姫「天地の神も御照覽　いかに心の汚れたる

愛子の姫も徒に　人の夫をばそゝのかし
宿の夫とはなすべきか　黒姫さんの脊の君は
高山彦と聞くからは　同名異人の我夫を
誠の夫と思ひつめ　迷ひ玉ひしものならむ
あゝ黒姫よ〳〵　妄も神の大道を
守る身なれば如何にして　詐り言のあるべきぞ
早くも奥へ進みませ　汝が命の疑も
旭に露ときゑ失せん　あゝ惟神々〳〵
御憲幸はひましませよ」

と歌ひ終り、悄然として涙含む。愛子の姫は黒姫のキツイ詞に甚つく侮辱されたような感じがして、女心の悲しくなつて來たからである。

黒姫「高山彦さまが桂の瀧とやらへ、修業に行かれたから、不在だと言はれたそうだがそんな仇とい事で、此黒姫はあとへ引くやうな女ぢや御座いませぬ。女の一心岩でもつきぬく、どこまでも調べ上げねば承知を致しませぬぞや。大方奥にかくれて御座るのだらう。稲荷か何かの託宣で、此黒姫がここへ來るといふ事を前知し、大方皆の者が腹をあはし、門番迄に言ひ含め隠して御座るのだらう。何と云つても隠すより現はるゝはなしといつて、しまひには尻尾が見ゑますぞや。ヘエ御免なさいませ。コレ〳〵番頭さん、奥へ案内して下さい。夫の所在が分るまではビク共動かぬ此黒姫、マア暫く御厄介になりませうかいオッホ、、、」

愛子姫は先に立ち、奥の間に導いた。茲には玉治別が腕を組んで、何事か思案にくれ

てゐた。

黒姫『コレ〳〵お愛さん、お前も餘程のすれつからしと見にて、千軍萬馬の刼を經た、此年寄を甘くチョロまかしますなア……ヤアそこには一人何だか見覺にのあるやうな男が坐つて居る。コリヤまア何の事ぢやいなア。大方こんな事だと思うて居つた。矢張高山彦さんは桂の瀧へ行かしやつたのだらう。其不在の間にこんな男を伴れ込んで、イヤもう話になりませぬワイ、オッホ、、、』

愛子『モシ〳〵黒姫さん、殺生な事を云つて下さるな。外聞が惡う御座います』

黒姫『外聞の惡い事を誰がしたのですか。高山彦の夫に代り、間男の制敗は私がする。サア お愛さん、氣の毒乍ら、トットと出て下さい。アーア高山さんが不在になるとサッパリワヤだ。一邊惡魔の大清潔法を行らないと、神さまだつて此館へは鎭まつて下さらん……コレお愛、何をグヅ〳〵して泣いてるのだ。泣かならんやうな事をなぜなさつたかい、オッホ、、、、さても〳〵氣の毒なものだなア。私も同情の涙がこぼれませぬワイナ、ウッフ、、、、あのマア悲しさうなないじやくりわいのう』

玉治『ヤアあなたは黒姫さん、最前から待つて居りました。サア此方へ御越し下さいませ』

黒姫『何だ、お前は玉ぢやないか。門にも玉が居れば、中にも玉が居る。お前がお愛の情夫だなア。何と抜目のない人間だなア。高山さんの尻を逐うて、こんな所迄やつて來て、チョコ〳〵とお愛に可愛がつて貰つてゐるのだろオホ、、、。若い時は誰もある慣ひだ。本當に敏腕家だ。ドシ〳〵と体主靈從主義を發揮しなさるがよか

らう。若い時は二度ないからなア。併し乍らよう考へて御覽、お前も三十の坂をこ
えてるぢやないか。十九や二十の身ではなし、チッとは心得たがよからうぞ。併し
お前の戀愛を私が彼此れ云ふのぢやない。サア早く今の内にお愛を伴れて駈落をし
て下さい。高山さんがお歸りになると、大騒動だから、チャッと早う出なさい。お
前が可哀相だから、親切に言うのだよ」

玉治「アーア、情ない事になつて來た。黒姫さま、私はたつた今の先、此お館へ參つた
のですよ。實の處は高山彦さまがつくしの島へ渡ると捨臺詞を使つて、あなたにお
別れになりました。私もそうだと思つて居つた所、豈計らんや、高山彦さんは伊勢
屋の奥座敷にかくれて、暫く御座つたそうですが、黒姫さんがいよ〳〵自轉倒島を
立たれた時分から、ヌッと顏を出し、毎日日日錦の宮へ御出勤になつてゐられます
そこで言依別命樣が聖地を立たれる時……黒姫さんが可哀相だから、お前御苦勞
だが、宣傳旁つくしの島へ行つて、黒姫さまをお迎へ申して來い、そうして夫婦
和合して御神業にお仕へなさるよう取計らへ……との御命令で、はる〳〵貴女の後
を慕うてここまで參つたので御座います。愛子姫樣と云々なぞと云ふやうな事は夢
にも御座いませぬから、どうぞ了解して下さいませ」

黒姫「何、高山彦さんが聖地に御座るとは、そりやお前本當かい？」

玉治「何うそを申しませう。萬里の波濤を渡つて、こんな所迄嘘を云ひに來る者が御座
いませうか。黒姫さま、よく御覽なさいませ。此繪像は當家の御主人の生姿で御座
いますから、能く御見並べなさいませ。本年卅五才の屈强盛りの活津彦根神さまが

高國別と御名乗り遊ばし、表向は高山彦と呼ばれて御座るのですから、あなたの御主人とは全く同名異人ですよ」

黒姫は其繪像をジックリと眺め

黒姫「いかにも違つてゐる。……ヤア愛子姫様にらい御無禮な事を申上げました。どうぞはしたない女と思召さず、神直日大直日に見直し聞直して下さいませ」

愛子「ハイ有難う、御了解さへ行きましたら、こんな嬉しい事は御座いませぬ。どうぞ御緩と御泊り遊ばして、神さまの御話を聞かして下さいませ」

玉治「愛子姫様、黒姫様は別に悪い心で仰有つたのぢや御座いませぬ。餘り一心に當家の御主人を自分の夫と思ひつめ、はるゞゝお出でになつたものですから、逆上遊ばすのも無理は御座いませぬから、どうぞ惡く思はないやうにして下さいませ」

愛子「ハイ有難う御座います」

と云つた限り、疑のはれた嬉しさに歇り泣きの聲さへ聞にてゐる。

黒姫「アヽ、私位因果な者が世にあらうか。遙々夫の後を慕うて來て見れば人違ひ、捨てた我子ではあるまいかと、はるゞゝ建日の舘へ行て見れば、之も亦人違ひ、どうしてこれ程する事なす事が食ひ違うのだらうか。之もヤッパリ前生の罪、否々神さまから賜はつた伴を、若氣の勢で捨てた天罰が酬うて來たのだらう……アヽ、神さま、どうぞ許して下さいませ。そうして夫の所在の分りました以上は、厚がましく御座いますが、どうぞ伴の所在を知らして下さい。一度悴に會はなくては死ぬ事も出來ませぬ。あゝ惟神霊幸倍坐世」

と神前に向ひ手を合せ、涙乍らに祈願する。玉治別は首を傾け乍ら

玉治『モシ黒姫さま、今始めて承はりましたが、あなたにはお子さんがあつたのですか。そして其子はいつお捨てになりましたか。實は私も捨子で御座います。未だに兩親が分りませぬので、日夜神さまに祈り、一目なり共兩親に會ひたいと、今も今とて憂へに沈んで居つた所で御座います』

黒姫『何、玉治別さん、お前さんも捨子ですか、そりや初耳だ。丁度私の子が今生きて居つたならば三十五歳になつてる筈だ。お前さんの年は幾つだつたかなア』

玉治『ハイ、當年三十五歳になりました』

黒姫『何三十五歳！、そりや又不思議な事もあるものだ。併し私の捨てた子には、脊中の正中に富士の山の形が、白い痣で出て居つた筈だ。これは全く木花咲耶姫さまの因縁のある子供だからと云つて、富士咲といふ名をつけておいたのだが、餘り世間が喧ましいので、守り袋に富士咲と名を書きしるし四辻にすてました。思へば〳〵可哀相なことをしました』と泣き沈む

玉治別『何と仰有ります。其捨子は富士咲と申しましたか、そして脊中に富士の山の形の白い痣があるとは合點のゆかぬ御言葉、一寸失禮ですが、黒姫さま、私の脊中を見て下さいませぬか。私の小さい時は富士咲と申しました。そして人の話によると、何だか山のような痣が出來て居るさうです』

黒姫『それは又耳よりの話だ。一寸見せて御覽！』

『ハイ』と答へて玉治別は肌をぬぎ脊をつき出す。黒姫は念入りにすかして見て

黒姫『ヤア的切り富士の山の痣、そしてお前の幼名が富士咲と聞く上は、全く私の忰だ

つたか。ア、知らなんだ〳〵、神さま有難う御座います。因縁者の寄合で珍らしい事が出來るぞよと大神さまが仰有つたが、いかにも因縁者の寄合だなア」

と云ひ乍ら嬉し涙にかきくれる。

玉治「そんなら貴女は私の母上で御座いましたか。存ぜぬ事とて、いつとても御無禮を致しました。どうぞお母さん御赦し下さいませ。あゝ惟神靈幸倍坐世」

と兩手を合せ、嬉し涙にかきくれる。

之より黒姫は愛子姫に厚く禮を述べ、無禮を謝し、且德公、久公にも其勞を謝し別れを告げ、いそ〳〵として玉治別、孫公、房公、芳公と共に、再び建日の港より船を漕ぎ出し、由良の港の秋山彦が館に立より、麻邇寶珠の神業に參加し、目出たく聖地に歸る事となつたのは、三十三卷の物語に明かな所であります。惟神靈幸倍坐世。

かく述べ了られた時しも正に午後六時、表に出て、天空を見れば、ドンヨリと曇つた大空を南北に區劃した青雲巾二三間と見ゆるもの、東の山の端より西の空遠く、輪廓正しく帶の如く銀河の如く横たはりつゝありました。

（大正一一、九、一七、於七、二六、松村眞澄錄）

瑞月

かて〻加へて下等格
夜半にならばかすかなる
氷の如うな幻影が
計り知られぬ事だらう
暗雲が横たはるその刹那
黒い汚ない魂が
深い吐息に沈むだろう
頻りに往來狼唄し
虚無な閑寂な

瑞　月

官能の微妙なるおの〻きは　吾全身の生血を泡立たし
暗黒の中に輝やく　靜思の光明は
三五の月の空高し　暗黒の輝きは消え失せ
氷のやうな幻が　印象帶をかけまはる

〔海洋萬里戍の卷〕終

大正十二年十二月十五日　印刷
大正十二年十二月廿五日　發行

海洋萬里戍の卷奥附

定價　金壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地
編輯者　櫻井重雄
京都府何鹿郡綾部町大字神宮寺一番地ノ一
發行兼印刷者　近藤貞二
京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地
發行兼印刷所　天聲社
〔振替大阪六〇五三四〕

不許複製

▽豫告

海洋萬里（亥の卷）十二月二十五日發兌の豫定

海洋萬里【亥の卷】目次

序文……頁
總說……
第一篇　天意か人意か
第一章　二教對立……
第二章　川邊の館……
第三章　反間苦肉……
第四章　無法人……
第五章　バリーの館……

第六章　意外な答……
第七章　豪塵……
第八章　惡現靈……

第二篇　松浦の岩窟

第九章　濃霧の途……
第一〇章　岩隱れ……
第一一章　泥醉……
第一二章　無住居士……
第一三章　惠の花……
第一四章　歎願……

第三篇　神地の暗雲

第一五章　眩代思潮……
第一六章　門雀……
第一七章　一目翁……
第一八章　心の天國……
第一九章　紅蓮の舌……

第四篇　言靈神軍

第二〇章　岩窟の避逅……
第二一章　火の洗禮……
第二二章　春の雪……
第二三章　雪達摩……
第二四章　三六合……

海洋萬里(亥の卷)目次　終

申込所　丹波綾部町　天聲社

王仁文庫（全十篇）

出口瑞月氏が神授の大經綸と天來の大抱負と、縱横の大神機と時に應じ機に臨みて、隨所に閃發せし文章詩歌其他二十有餘年間積んで山をなす。乃ちその中より、精粹を拔き、珠玉を選び、序を正し類を纂め、王仁文庫と題して茲に刊行の機運に向へるは誠に時代の急迫の然らしむる所にして、實に百萬讀者の渴望を醫する神液甘露たりと謂ふべし。

王仁文庫
第一篇

皇道我觀

定價　金五拾錢
郵税　金貳錢